萬國新話 卷首

洋学文庫
文庫8
B 78

圖繪之部 一百廿四

萬國新話序

坤輿大矣辟諸一器而聚衆
焉者多不其然乎夫羣方
所分崎萬國所欝盤河海
山嶽品物馮生埃圢乎亡
不周匝彩紘乎亡不容布

39-8209

其由車材樸屬而微至幎
爾而下迤以為完久者以
為利摶者直指者固抱者
式較軹擠軫轐衡輈雜錯
糾林之交倚互持鯀會縟就
錫鑾和鈴又陪而九十其

儀邪即令始駕而遽御攸
將惴惴乎唯其目眩文彩
耳駭殷轔噦鏘之音是懼
奚暇能察夫三材庶物之
不失職與步驟折旋之比
節應樂中規矩哉迺是編

之故爲椎輪庳言儕俗無
峻崇雖登之艱平易質樸
無眩惑聽焚之患上比諸
馬前之車奚不可乎過此
以往日閑月將則豈啻殷
訏可馳百仞可登哉其用
觀八極一瞬千萬里者亦
可以馴致也夫是爲序
寛政己酉之冬
槐園　宇田川玄隨撰

宋晉山人

萬國新話序

天之巳窮也日月星辰之入焉而顯矣則其包括覆幬之善外勿論已廼地之塊然中處亦莫止載華嶽而不重振河海而不洩哉亦大之洲萬有之國其將具載並持而不遺焉則其廣莫豈易知者哉是以章亦之步於夏鄒衍之談於燕或失則局或失則侈均之不獲

其實漢張騫使西域足跡不能生葱嶺天竺之外元人窮河源亦至崑崙而止嗚呼地其不可知也乎獨有遠西氏之子不曠山不直地躬履廣土積年累世以致詳覈乃至其道里名號風俗物產國記周悉歷歷可據復奚畫焉余世官瘍醫其所為聚以共者多亟諸蘭舶之所齎而其物咸係西

洋諸國所生欲詳其物性雜之良苦固漢籍之所載將何以戡廼不忍吾世之苟承家技循舊自安者恬然置諸不講也則勢必不得不直就西書夫既通其書論其事不知其地可乎此余之所以有翻譯萬國圖及圖說之舉也家弟中良當時在側紀其談餘且旁及自所涉獵事相類者不國咸

編名曰紅毛雜話已刊行于世頃日書肆
来請家兄曰雜話之編実千百年未聞
有若是其奇者都人士家觀戸傳施
及四方紙貴之願為論其軼事再著
一編家兄則以余之因齎疚瘍造焉者
日蕃有徒曰姑舍爾而學而縱我驅而納諸
敝瘵劇殺之役不能游息於茄園操觚
若昔日乃笑而謝之曰廼公近志存急救

濟為善汝勿馮婦實我哉答曰小人不達
大人之變一班僅窺輒昧全觀自貽編顯
之罪雖然平素所漸積蔚矣多文何
所不富抑不入虎穴不獲虎子直探麓
中得其曾所孫悅而去之幾刻成是
為萬國新話余取而閱之雖則一時雜
錄然於其五方萬國道里名號風俗
物產庶足以知其梗槩乎則世人少家

序

予為攘臂下車亦所不恤也

寛政改元之臘月初六書於迎旭書屋閑窻

桂川甫周國瑞撰

例引

造物主の天地を化生するや。地海共合して一ツ北圓躰と為す。海八分地體の四隅なる所地八其凸起たる処あり。人類居り。畜獸産育し。草木果実を生ずる是を発育す。其地球分て四世界とす。一を亜細亞と云ひ。一を歐羅巴と云ひ。一を亞弗利加と云ひ。此三世界八古来より有名大洲なりて。既に一を亜墨利加と云ふ。（我邦明應の比西洋の人リカヘスプキロフロレンテイヒなる者始て此世界を発見し故に其地を称して亞メリカと云ふ）

る地なる故。西洋を新世界と称す。想て四世界の方位各國に接壤ハ宛ら兄甫周法眼釋する所の。地球圖說ハ詳なる故。此書中およ圖を設りぐ。

○此編ハ四世界の内。亜細亞洲中の雜說のみ輯錄す。日本中華ハ亞細亞中に勝地なり。其事蹟。予ら茶話待よ有べ。ぶれど亦小贅せば。其他朝鮮流虬等のみに人口ハ転矣しく聞ば新よせざるものハ省けり。

○書中の地名。皆明儒に釋字ば用ゆ。秋字なれ

るものハ國字ゆえ書るるもの。紅毛新話に例のめり。

○促呼。合呼。引呼の例上よ同じ。

○此書ハ誠よ雜書中の新奇よして一ぐる書也る仮書ハ誠よ雜書中の新奇よして一ぐる書麓の底へ歩迄畢し。或日申椒堂の主。ちくなく探り出して獨讀燈ば。頻小上木せん事ばくる。予再三いるども。更よ承引ぐ。ぢく懷ゆして去んぬよ。さらバ華夷通高考。長寿夜話なるの冊子ば見ぐたるるるの御仏手帳

あり。なをよまるるもあづかるなれそ。ふ
しのまくらかくはひやうし。

寛政改元季秋端午

萬象亭主人誌

萬國新話總目

巻之一 亜細亞之部

亜細亞洲の畧説
屋を車ふ駕ふ話
君長を斜武といふ
馬肉をくらふ話
父母ハ喰ふ話
葬送り人を殺す
女國の事
天下の霊囿

天竺の服飾
王の子を立ざる話
カナノール島説
根樹の説 并圖
哀樹の説 并圖
安日河の事
南天竺の異
バサルの話 附東方真球
髑髏の臺 附鹿角の臺
天下を戒指小諭ふる話

都児格人の島説
濃送軍の島説 附駝の説
莫臥爾人の島説
石小化ふる人の話
海小橋をふる話
如德亜の國史
テリアカの説 并功能
死海の説
巻之二 同上
生膽酒の事

占城國の婚姻
同國の葬法
尸頭葬の説
酒を呑ム話
金塔の中ニ九頭の蛇精怪事
真鍮の服飾
寺ハ竈なる話
真蠟の事ハ
同國の人澡洗の事
同國の送葬

陣毯の事
同國の産婦
兄弟交合して死する話
天獄の事
熱油紙抑ム話
死屍の仕法
牛城合ハざる事
揚枝の事
婦人智恵多き話
陰莖ニ七宝紙飾ル話

鳥葬の事
聖浄の話

巻之三 同海嶌之部

瓜哇紀傳
竹鎗の會の事
聖水の話
巴旦人日本へ漂流の始末并巴旦人の畧說
老人を救ふ話
巴旦の甲冑
同國の家他

巻之四

象人話を解る話
桂枝をゆうの事
涅槃釈迦の話
人の血を浴る事
犀象と戦ふ
鷲の王の事
呂宋の地を伊西把尼亜小奪われる話
男色を禁ずる說
丁子并西國茶の說

食火鶏の説
唐泊浦の孫七漂泥へ漂着の話
毒の木の実の説
日本人説見世物ふけつなる事
焼酒作り拓
イリンカットの人物
死人の首を五輪へる事
文郎馬神の風土
同地の言語
高人の呼聲ふる物を用ゆる話
同地婚娶の式
丁子 椰子油の價
同地年中行事
燕窩の説 附黒坊役人説切害せし話
喪ふ居者歌舞する畠説
濵田兄弟智勇の事 畠
附録
地中海の内羅得嶌の湊口銅人形畠説

萬國新話總目終

萬國新話卷之一　亜細亜之部

東都　森嶋中良　編輯

○亞細亞洲の畧說

家兄甫周法眼れ譯說ふ曰。天下第一の大海地中海細亞といふ。西の方「タナイス」大乃「ドウイス」北斗星両大河を以て。歐羅巴と堺沙ちゃくこ「ニ」ヒルヲ「ゼイ」地中海「ヒ」デゼイ」西紅海の間に一線路ありて。此二の海水抜きりてあふとあり亞弗利加と境を接へ。東の方「ヒ」ナ」支那つ今の清國あり

み至る。北の方「シケイ」ふありて。「エイスゼイ」永海と隣り。南ハ「イレデヤンスゼイ」應帝亞海み隣り。幅員廣大みして人民繁盛あり。諸の藥品。香料。玉石。珍珠をそなへ。種々の品類ハ有る事。他の三洲に勝れり。亞墨利加をいふ。

三洲なるもの。歐羅巴。亞弗利加。

「ケイ」亞細亞ハ人民繁盛にして。聖賢首出の鄉なり。國土の開闢も他の諸洲みなんぢち。化の法洲ハ上又つる三洲あり。極めて有名大洲なり。其域を分て六ッとす。

小屬し。

「ハ「ムスコビヤ」沒斯箇未亞

「ハ「ドルコ」度尔格み屬し。

「ハ「タッタル」韃靼小屬し。

「ハ「ペルシヤ」巴爾齊亞小屬にして。此洲ハ屬

「ハ「イレデヤ」應帝亞み屬し。

「ハ「ルシヤ」巴爾齊亞小屬にして。此洲ハ屬

海岸多くして多し。其著名なるハ。「シベリ」止皮里。北海の中

「セイロ」錫蘭。應帝亞海の中ふあり。

「ボルネオ」勃泥「セレベス」食力白私「マロロ」馬路古「バンダル」番方「ギロロ」及勒々「ロソル」呂宋等あり。吾大日本國も。亞細亞洲中の。大勝地なり。

○屋を車み駕して韃靼

韃靼而鞑國中ハ大てい城郭宮室ハ皆屋を車乃上み造りて。居所をうつすを役利とす。家見の譯說ふいく。此玉中縣邑村落を名

唾遠陽のめき物ハ遠りて夜ハ老少男女共に
ホトをさぐり。蓑をとり後の熱毒まで舐り取る
とあり。是ハ色ごのみけて「ホルダ区」韃靼語とい
ふなり。

○君長ハ斜武といふ　同上

同国の人毒勇を好むあまり。病ハ係りて没
するハ大なる辱しとせり。明人の說
或說ハ曰。「ヨハンゴラ」正統
土人のみなる法暴なり。能く暑と饑渴ハ
耐也。國俗其の猛勇絶倫なる者ハ立て主
となし。「ヒヤム」といふ。即君長の

義なりと。諸蕃中良強なるハ。蝦夷の
人。ある度の人ハ物して。去やむといふ。色其の地滿
州ま接する也。韃靼のほとりハ佛へ通ずるなり

○馬肉ハ食ふ　同上

土俗ハ馬乃肉を嗜む。純中なる所をハ
て絶品とす。故ま貴者ハ[illegible]食料ま
えらる事[illegible]とあり。道ハ小
飢渴すれば。所の馬ハ刺血を瀝して
色ハ飲む。又酒を好む。碎ハ[illegible]て業とす。

○父母ハ咎ふ　同上

此國中。東北の方れ土人。父母病ふ死せんとする時、則殺して是を食ふ。親の恩を忘れ人で腹の外ふ葬る。いぶせ丘陵の下ふ埋るふ恩を去るを依りて腹中ふ葬ると。明人の説

○葬送ふ人沙殺を 得白得

又西ふの一種ふ「テペ匡」得白得といふ國あり。至大の剛國なり。其俗國王の死後輿棺て葬送し途中ふて人を殺ふ時ハ。ちで死ぬるを殺を。唱へらく死して其王ふ事ふまつれと一王の葬礼乃時。人を殺さるを。乃ゆりつく

行へしとなり。

○女國 亞媽撒搦

往昔韃の西ふ當りて女國ありと。「アマサ子匡」亞媽撒搦

といふ。ものも驍勇ふして戰を善を嘗て「卍ペ又」厄弗俗といふ。一つの名都ふ責破る。其地ふ廟祠を建て。基址を湖中ふ築くを約四十四丈。寛二十一丈余。内ふ白石の柱。大抵一百五十七株ふ。どいを。各高七丈許。祠の内石像沙安盃を。祠乃四面ふ四ツ門あり。其門毎毎白石をもりて造る。格を架し正門の系

よ義石を以て精工を盡したる神像を建
てり。此神祠の経営。二百二年余あり。
毎年とこなへ宏麗奇巧かとんど思議のおよぶ
所ならず。西洋の人。天下よ七奇あるを称す。
七奇。蛮語ふて「セイヘンウンドルレイキ」といふ。即七奇の義なり。又は「ヘプタ
ポンエペ」とふ。虞初新志中ふ七奇説あれども。そもそも信ずべ
からず。
毛詩の一ふ居。夫月ごとに一度男子
容してその地よ入しめこれと交接て孕
ませ。毒而代子。男子あれば輙ちこれを去ふ
今ハ代國ふ候られて。毒詩の名ふ称する而已
なり。明人の家兄の澤説ふ曰。古「イレデヤ」の西
ふ「アマサ子」國ありて。そもそも女國なり。今ハ亡びぬ
又南亞墨利加洲中ふ「アマサ」亜媽鑽といふ國あり。
此地よ大山ありて。其山中ふハ婦人のみ住居て。春毎よ
代而の男子ふ招ぎて会歓をなすをし。平日
此山中ふ迷ひ入男子ある時ハ矢庭ふ是ふ射殺
もとそ。其婦人乃行跡。亜細亞洲中の女國よ似たる
ふ。「アマサ」と名づけたるよしあり。「アマサ」ハ「ア
マサ子」なり。「アマサ」ハ今世ふ至て是家兄澤説る
而の「コウラ」ドトルロ書名中の説なり。
○天下の宝を囲應帝亞

應帝亞國ハ即天竺五印度なり果實多し。凶年饑厳と
いへども。玉絡を以て食ふ。元来飢絶て餓
渴の患なし。此地真珠。玉石抔の外。藥品香料と
毒毒。天竺ふ亜用する所。大半此玉抔を所
なり。さるにより西庠の人称して天下の園囿
といふ。（蘭の訳文なり。第ろは吾邦の俗語ふ大抵八日ホ玉中の蓋所ふ
ととのいつるとなり。たそびれなり。）

○服儀　同上

昭代叢書中ふ収める所の外玉竹杖の図ふ。

寶髻青螺錦罽裁云々

注ふ云。五印度の玉王ハ錦罽沙彼す髻ハ螺のごく
結び。其の髻ハ下ふ垂さとなり。（髻ハ髪ハ下ふ垂さとなり。婦人の衣裳ハ長
雜話ふ載せり。）又明人の説ふ、いとく男子ハ衣沙衣を僅
ふ天ぢうを布を以て腰の下沙掩ひ。女人ハ
布を。以て首ふ巻き足まで垂ふとなり。（是ハ下流の
者なり。）

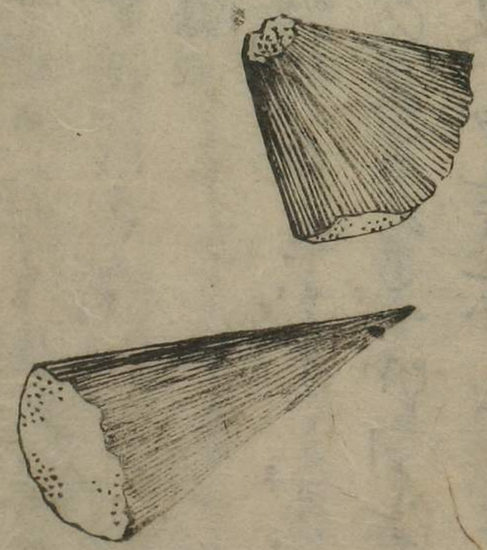
○王の子沙立ぞ　同上

明儒説る所の万國圖説ふいとく。印度亞玉中
乃士農工賈ハ皆その業を世みす國王ハ父子相傳
すなり。其婦妹抔子沙りて嗣とふ。王
の子ハ抔抔禄を給して自ら贍とる。新井
先生の采覽異言ふも此説を載られさり

○ブルートステーン 同上

印第亞國中「マラバル」麻剌襪尔に屬する。「カナノール」と
いふ地より一種の石を產ず。紅毛語にて「ブ
ルートステーン」「ブルー」は血「ステイン」は石なり。「ラテイン」羅甸語
多。ムラ〳〵くハ西洋寺院を我しく。といふ。又產する石の名を以て「カナ
ノール」ともいふ。石の質代赭石に似り。硬堅
以て擊破ぐ。一顆ごとに尖る形ありて破片は針と
束ねくるめくの紋あり。金瘡靭血。其他身より
血をおもてもの。此石油に磨る時は倏忽に血
油沸む。又出る所の鮮血も。此石を削りて振かく

ブルートステーン之圖



きバ。不を隔つといへども。血脈通ずるの神の如く。此物の外。万国よりの産する菜品の形状を活ハ伯氏著す所の。和蘭菜選よりも。はるかに詳しかるべし。

○根樹　東應帝亞

「ヨーストインデヤ」東印度の産ふ。多く奇草奇木を産す。就中二ツの異木あり。一ツハ「アルボルデライス」と名ぐけ。又「ウルテルボーム」と名付く。紅毛語にて根樹といふなり。其始生の時ハ他の樹木に異なる事なし。さて長じて後。

枝の上より細條を出し。纖々として下り垂地より。又ふたゝび根を出ず。年を経ふるにつて。本幹と異ならず。此状ごとき数かぎりなく連結して巨なる林をなす。枝葉蔭々として天に参り。周圍二里に及ぶものあり。枝毎に皆細條を出し。飄揺して地に垂れ。見るかたち「ヨハンデラ」が地球儀記中の説あり。伯氏これを榕樹ハ誤なり。中良案るに。倩ら画ぐ不の万象人物の多き。木の枝ハ法の生ずる所なりとて。画ぐ物ハ。枝木を画ぐ。えてまつたくなるべし。

めぐ細縄を掛るがごとし。

又云。此樹林を成ハ。枝葉上よりおりひて屋宇異なるかゝ。國俗その下に住居することあり。大なる林

根楙之圖

「ドゝヨーロ」紅毛本草に載る所の圖なり

同弱木之圖

我邦にも小樹なるものあり

哀樹之圖

「ドゥヨーロ」の畧之

小いなりてハ千俗人を生ずべし。其樹のは原幹(ぬきし)よりを紅葉ハ斬て汉て佛小供を。善薩樹と名ぢくとなり。明人の説を以我家の後園(こうえん)小に樹を植(うゑ)。花咲ぞして実ハ結ぶ。くゞめ枝より芽出しのめくなるふかき痩(ふし)を生じ。日ハ経ふまるうひて。そくくと大(イ)よるりまた。遂に將(くれば)の形ハ無花果(いちぢく)のやくなりて色黒く。紫色の斑点(まだら)あり。ゆゑに弱(よわき)樹なる故枝上の両條地よりこずず。

○哀樹 同上

又一ッ種の奇木あり。「アルボルデリス区」と名ぢけ又「ドローヒケボーム」と名付ル。蚕語少て衰樹といふ義あり。其花昼ひらぐ。夜よ至て始て開く。其樹の中ハ枯くるぬく日没て四半時ぐらひ後ハ然よ消樹花ハ発く。枝葉ハ見ふ絶ず其茎芬々として愛ぬくあり。て嗅ふいられぐ書く地よ落樹ハ亦枯委む。夜々さとあるひるく孤球号説ハ樹とあり

○安日河　同上

東應帝亞ハ大河あり。「ガンゲス」と名ぢけ安日人いらく。一度ハ此の河ハ浴する時ハ他の罪業ことぐく消除ぬと。かるぐ名ハ五印度の人咸ハいて沐浴し。こひ祈ぐくハ罪障ハ消滅して天よ生をうんるハ此ハ四元行ハ事ハの人ハ皆四元行ハ事ぞるとあり。四元行の事ハ紅毛新話ハいへ。家兄の考に曰附音陳襲安石國ハいふて。柘榴子ハ茅来る此ハ安石國ハ柘榴といふ。安石國あるものハ即ち安日の河ハ安石安日音おなし。

○南印度の異

「ソイドインデヤ」南印度亜の地勢三角形をなせり。其末の鏡なる和。闊さ凡百歩ばかり。東西相去ること遠きなり。気候はなはだ熱し。東の方海辺は反て寒冷なり。西の方は霧天なり。此地をこぞること八彼地の家らを焚て。彼方は大風海を吹て。洪波天を散ふがごとくなるか。此方は漣漪を立てゝ平地のごとく穏なり。されば南印度亜の奇異とする和なり。明人の説

○バサル附東方真珠　巴尔斉亜

「バルシヤ」巴尔斉亞國より玉石。駿馬。絨緞を出す。又海の「バサル」把雜尔○鼎千鮭苔なり。絡ふ馬皿。又馬猿なり。ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝを産す。此物は「ベウアル」とゝふ獣の後よりをかをとの物。獣の形羊のごく鹿に似たり

此國の海中。「ヲルムズ」忽魯謨「ハリヲ」私「ハリヲ」等の湾々を出る和共珠を。西岸とは東方真珠と称して殊に貴重なり。其他「バレム」「カンパ」「ユルハ」等の諸島も。亦多くはれば各不に採得る和。其時「ヲルムズ」より輸る。土人裸體にして腰に小き籃を帯。海中に没すること二十尋。たゞちに海底にいたり。真珠母を拐出日中にあれを晒

其の貝、如おのづから冥々の間に俟て、之を採ると
あり。伯氏の説

○髑髏臺　附　麻角臺　同上

當時百尺斜亞國王一ッの臺を建。是我ひ揚る
不の回々國人の所に聚て築くるの所なり。回々國の字采覽異言
中に説あり。亦之を〻く西洋の
塔又は地名なるもあり。又大に猟して一圍を麻に
獲事三万。其の骨を以て
を集めて臺とす。今なほ存せりと云ん。明佛説
万國図説
中の説

○天下に戒指とす　同上

都児格人之圖　紅毛樓板の万國地圖に〻び各國の人物を畫中に載る所なり
都児格八世界才一の強国なり。
亞弗利加。歐羅巴の
三大洲に
亞。都
児格。歐
羅巴都
児格。亞弗
利加都児格とも云ふ。往昔
亦と侵し奪ひんとて
今は我朝やまだ。
清なり甚
患とす。既を包ふ。その外日本世界
等の國も皆是に用ひ。亦さしるハ「ストロイス」といふ鳥の羽毛
を用ひ「スタロ」といふ。鳥の羽毛
を以て人を指揮

護送軍之圖 同上

巴爾齊亞海中の明人の黙生丁海と称するなり。勿心魚日讀斯小島あり。亜細亞。歐羅巴。亞弗利加の中央なり。五つゆへに。三大洲の富商大賈ならぬ往来する。百貨駢集し人烟輻輳せ。海内の珍奇をもあつ致し。ぐれたるの多くも。貨の物なるよりいと安くもふ入しぢ。土人いへらく。若天下の一つの戒指かたくて吾勿心曾漢彭八戒指を。そなへる。宝石所多べし。と自負するとあり。

明人の説

○護送軍 附駝之説

亜剌皮亜

「アラビヤ」亜刺皮亞國ハ「トルコ」都児格ホ屬ス國中ホ
数百里の郊原いづくか遥かとも志らぬ沙漠多し。
扶桑迚國と通流する高旅まゝハ如德亞國ホ
馬哈默の廟へ馬哈默ハ華ホいとある国を教ふるもの多り。其ホ国を不の者ハ中
人ホ。西洋ホてハ「マゴメター子」といふ。扶桑ホ「びよ
其遺跡を尊ちんとて。如德亞國（まうつる人多しとあり。）系統する仏客。
亜刺皮亞人の授套を恐れ黨ホ結んで往還ス。
守護ホて路次の礼妨を禦志めんる。近國よりも送り
乃甲辛ホ志もとゝ。通商の旅人。並ホ警固ハ軍
勢。わかもて四五万人より七八万人ホ及ぶものあり。
糧系行事ハこゝぐを院ホ負志む。兵まゝ八九千
疋よりゝぞといふ。見送の軍兵ハ皆甲冑を帯
兵器を佩ひ。ホ塵ホ。武を張り勇ホ逞
しく。隊伍を乱さず押ゝ歩。行軍の形
勢ホ。おとるゝぞ。其内地理ハ志く水草ハ在所
を知らる人ホ案内とし。扶ハ多ホ近き石ハ
野沢もるて。ハもゝの旅ハ。全く見送の
軍兵の力ホ依ハ。往還志られるなり
又亞弗利加洲の「アレキサンデリヤ」亞礼撲山的里亞より。都児
格ハ都へ。ホの名を公斯當丁那波里ともふ紅毛製ハ志ら仕来の海上ホハ。海賊ホ防く
為の。見送軍とあるとも。其見送の軍兵のま

と。紅毛人て「カラハーチ」といふ。澤山て渡送軍
といふ。義なり。（義は訳なり。ヨウラッド明人ハ「カラハーチ」
ヨリ巳の書説なり。）
防寇と譯せり。海洲坂を行ふ跑を用ゐる
此獸百貫目の荷物を負しとも。晝夜跑て行く
ることを志ること。其脚長きが故ふ。海陸共行ふ
ことを。一名ふ麦雲子の。大サ芋魁ほどなる和五ツ
六ツ食し。又乾草を齧。ハ十日ほどふ
一度飲ふ。腹中能ふ物を。共物行ふ
の力ヲ水を之き叶ハ。ふ抜を剖て内臓
冷ふして飲ふ。其骨肉皮毛ことごと

く茶用ふ。形状主治ハ和蘭茶選ふ詳なり。
（本艸の説ハ甚粗なり）紅毛語て「カメール」といふ。白素なる
「テレープ」といふ。波天鵞絨のごとき毛布ハ。ハ熟の毛
布ハ。ハ熟の毛
獣なり。吾邦にもかの駄馬のかくりをひき
ものを用ふ。「テレープ」ハ。蛮人の氈舩ふ用ゐる
料ハ織物なり。ふ人。烟包。挾囊などを
作して材料とする事なり。

○莫臥爾國

明傳の説ふ日。五印度の内。南印度のこ古代ま

莫卧爾國男子之圖

此圖ハ「ハ」ニテイヒとゝ
紅毛書ニ載る所多シ

同婦人之圖

あて。其餘の四ハ皆莫臥爾ふ係とらるゝ。其の多
西印度ハ王兵五十万。馬千五百。象二百ふ有し
く。莫臥爾の軍を禦ぐ。其象の脊ふ一ツの臺
を負ふ。内ふ軍卒二十人ふ容る。しかも
鳥統千門のうち大なるもの四門。其の大統多
りの八牛二百ふ引かりつくるなり。一門ふ載
其ふ百万の軍實ふ出し。遠ふ出して防ぐ
とゝ。逐ふ傷ふ中わるゝ。多ふ留らるゝ而れ
麼乃ふ和東ふしとなり。

莫臥爾人の畫ハ。紅毛画の臨写なり。采覧異言

ふ曰其人赤髪紺瞳なり。男女皆白氏布を用ひ
改ふ。衣ふ領ふ。窄袖なり。之を世界乃内
莫臥爾國の華美ふ及ぶものなしと。紅毛人の
いふ。なり。西洋ふ於く番ふる而の金緞花緞
ハ大抵中国ふて織ふるものと。南蛮ふ我邦ふて
毛織と称するものハ彼国ふ織物ふ模て織る
なり。

○石人　納多理亞

「ナトリヤ」納多理亞　國ふ山あり。多く瓊ふ產ず。國人
彼て古れを鑿ふ。ゆる日一ツの石穴ふ入る事ふ

他ハ石人数かぞへるに堪ふ。是昔時敵を
避くる民さいふ穴居志るゞ死して後を
よ凝やう化して石と成るなりと（明海の説）
弔先年璽書を見し内よ大なる石窟の内
十字形ふなるとする死人数百立をおり人なを
て其死骸ゆかれうなる食の画畠をとゝ
書の名をも忘れうされ彼石人の畠多
しや越後ゆ國ふおるる石の弘智法印ゆ石人
の一種なるべし。

○跨海石梁　同上

那多里亞と都児格の東海をへだて衝つ其間五
を。むかし那多里亞王矣尔塞なるもの大
土石の功ふ真し海ふ跨がる石梁を架て支地
を通連す後代ふ至りて風浪よ衝撃せられ
梁頽廢せしとなる。（明人の説）

○如德亞の國史

明人の説よいへく天下の諸国に上古の事跡を
紀する史多しといへども其ものゝ三四千年ふ至
て訛謬多し。（「ユーデヤ」如德亞國の史書ハ

冠辭して六千年来。世々の史官業を絶ぜ
歴代の事実茫然を記すの。委曲分明なして
いさゝか脱漏なし。

○的里亞加　同上

如徳亞の西の國あり。達馬斯谷と云。土人藥を製
甚名あり。的里亞加と名づく。能百病を治す。
りつくれ毒を解す。此藥を試るに先ち
毒蛇を覓めて。身体を咬傷し。毒発して腫
脹時に此藥を一許を嚥ゝ。即愈ぶと云ふ
なり。各國にて珍異とす云々　明人の説　本草綱

目に底野迦。苦寒あり。百病中悪。客忤。
邪気。心腹痛。積聚を治すとあり。集解に蘇恭曰。
西戎より出る。彼人いふらく。豬膽を用てまれに
化すると。形ち久壊の丸薬に似て赤黒色なり。桂山先生の説に曰。
華人のいふ。久壊丸薬は印度の産。波邪は唐土
也。其印度のことを波邪と云ふ。故に久壊丸薬と云ふ。
さて来る。甚これ珍重。胡人を尽くたゞ
と敬ふ。此仙丹は西庠の人。常に用ゆる所にして。
起死回生の妙薬なり。吾邦にては重宝
齎来ることを覓得まれなり。極めて
滑易なる煉薬なり。ゆゑに痘瘡の死に
する

者ふ而已ならず。切を他病に試むるに
るゆあさいなく。其船未だ物と称するも多くハ
物ありて真物ハまれなりといへども支と尤いひ
ちがひて。志うと志俗を無ぞる人もあるべき。
時ある所二十年に来。前野蘭化先生のいさかひふ
よりて。東都の諸子重書を後学ならんとの
てより。「当メイル」昏の名ふ載る所の的里亞加方を翻
訳し。紅毛人「テリアカアヒドロマア也」とよ。只「テリア也」とる。其の上近代西客の口授と
交て其薬ふ製し。志ぞく経験する事ふ得ふ
いるる偏是　昇平の巨澤あり。的里亞加諸方

の中ふ一種ハ「アルムテリア力」あるものなり。「アルムハ
重語貪の義なり。是其剤はあるべきなり
志貪の名を下し。アイルとるる簡易
なりて志うも。其功上好の薬品多味を調へて製
たるものにあづかる。前医重人の携来るものを試
むるふ大半「アルムテリア力」なり。其巨和を弁ずる術ふ
かりるも。そもそも清豪傑重書を択ばず。其薬
を製する事を得るふ依てなり。豈愉快なる
るふあらんや。我邦にも製して施行あ
れども。経験なるに。舶来のものとかくるはも

りとよ。猶病ふ用ひて効あれども。目のあらを
よ験をはくる不死のめしあり。
汗を発し　眠油　疼咬頭痛ふよう。嘔吐
ふ利をとぐ。胸隔ふさがるやうなるき。胸さ
ぎして気安らざるを。つげめ。積痛疝気。
其他ろくくの痛油和げ。食毒酒毒を解。
痘瘡。痳疹ふりて功あり。然て拙き気表
病あ。死ぬべきき用ひ。方症の清発よまろ
しあり。癲癇。瘧。疫癘ふよ。熱のさ
川ある症あ。焼酒ろそき脊ふぬるべし。竹毒。

便毒。虫ぎし等。及風犬の咬傷ふ少酒ふて
ゆるえ塗てよし。癰疽発背。癤瘡ふ用ひべし。
大人ハ木穂子一箇ずつ。病ふよりてハ二箇ずつ
も飲べし。小児ハ黒豆一粒ずつ。茶にても白湯
にても送りて小児ハ何病にも用てよし。

○死海　同上

同國中に一つの海あり。其水ろかぶ鹹く。凝結て
松脂のごく。絶く波浪を揚げ。大木大石錨の
のたぐひを投入れども沈むるかし。力を極て
初入きどる没ふる事あるべ。國王かく

人をして沈むもの浮ぶもの入りもして其間海の日に映ずれハ五色の文彩とゐす。生海中水族を生ずるゆゑ死海と名づくとゐん。紅毛人ハ「ドーデゼイ」と云ふ。「ドーデ」ハ死ゐ「ゼイ」ハ海ゐ中良案るに。此海ゐハ石油の一種ゐべし。石脳油ゐる者ハ火脉ゐ多れゐ地中小瑞珠と生ず。ふつとくゑ溶蕩てさるものとゐ。童説ゐ少及べり。

萬國新話卷之一

萬國新話卷之二　亜細亞之部

東都　森嵩中良　編輯

○人膽酒　占城

東西洋考ゐ云。むかし占城の國王。古の越裳乃地ゐ。秦の時林邑といひ。漢の時象林といひ。又區連敍といふ。所ありて人の癘疾採。酒ゐ入るゝ是疾除まゝ是を飲ゐ浴。通身ゐ膽ゐるゝとなり。中良案ずるゐ。此癘ハ真臘國ゐ起るゐ。真臘風土記ゐ云。毎年八月の頃。占城王人の膽千斤採

去れ共依て去猟王。夜ごとに人を城外ハ出し。
往来の人ハ皆れで。縄を作りて。塊の内に入る。
ひよおっぷっせくしに任め。小さき刀にて右の
脇下と裂て捨て取り。数の足を埃て。占城王イ
慣とあり。

○婚姻　同上

此國ハ嫁娶ハ八月をとりて。女の方より
男に求む。同姓を嫁とるとあり。東西洋考の説　北史ニ曰。媒
者をして。金銀。釵。酒魚を齎して。女の家ニ
いたりて。吉日に定め。其日ハ男ハ
男の家ハ。親族を会して宴に設け。女の家にハ。
一人ハ婦門に坐し。婦門ハ夫婦の住所を云ふ。紅毛談話乃説合也又云へり。女を
引て男の家ニ至る。主婚れて婚盟をして出迎ひ。洗
で是に授るとあり。

○葬禮　同上

隨書ニ曰。王死れば七日。百官ハ三日。庶人ハ一日ハ
して葬る。函の内ハ屍を導従人ハ鼓を打て葬
通る。水道ハいくり。薪に積で屍を焚。其骨王ハ
金罷百皮ハ銅罷。庶人ハ瓦罷ニ収めて海に流す
とあり。葬送の時。男ハ女ハ髪を截て隨ひ来り。

為道ゐて哀を乞し。帰る所ハ更り哭せず。七日おとゝふ多紙樊花を供志て後死す。其かゝ
ひる。七こ西十九日ゐ為て罷とゐん。

○尸頭蛮　同上

星槎勝覧ゐ云古城の尸頭蛮ハ婦人ゐ瞳なし。夜よりゐれば。其形花去りて人の織物を含ひ。
花ゐ入て後體よ合ゐ。其形を封ず固ゐ。
ゐひ、體紙別處ゐ移せば即死す。病者糞ゐ
除ゐ時ゐ遇ば妖気腹ゐ入てゐ死す
云。外國竹枝詞よ。

那堪黒夜遇尸蛮
と詠じ。注よ小児の糞尖ゐ含ゐといゐ。此ゐ
以下ゐ伝説ハ此國の事ゐ多ゐ。
児童の耳を吸ひ。
乃中ゐ花頭の者ゐ。
んとする一日前より。頭ゐ頂へ
ゐる筋ゐ。妻子知て是を看守ゐ
状病ごとく。
事ゐて。蟹蚌の類を食ひ。
姑く美ゐ。

南の浸洞
名あり。
紅の線乃めく
ゐ及て
忽牙を鼓して去る。
岸泥ゐ
曉よ將として花還ゐ
ゐ。
ゐ云南方異物志

ふ云。嶺南の溪河。飛頭蛮あり。其の項ふ赤痕ありて
飛ふ至ること耳にて翼とす。花をて蚊を食ふ
ふ。三才圖會ふ云大闍婆國の中。中良案ふ闍婆國ハ爪哇の古名なり。
花を者あり。其人睡ふ頭能花ぶ云。瀛涯勝
覽ふ云。屍致魚と號る者ハ乃婦人なり。其目瞳ふ
夜寢る時ハ刈頭花ぐ人ふ入り小児乃臓を
食ふ。気小児の腹を侵せば必死す。中略夫ふの婦の
花ぬるる時ハ衆家屬ふ及ぶとあり。
異ハ真臘の飛頭の事なり。風土記ふハ其説なし。
鼻水醤を作。頭花で魚を食ふ云く吾邦にてハ

信ふ轆轤首とも。西國にハ抜首とも。中良案る
ふ。琅邪代醉に元の詩人陳孚ふる者。生く安南ふ
使する時。紀事の詩あり。

鼻飲如鋸齷　頭飛似轆轤
けぶし　條脉首ハ些清ふ　つるる也。予往年
相模鎌倉ふ遊べる時。長谷の辺ぬ所家ふて轆轤
首ありと云婦人ぬて頭ふ赤き痕ありて
ふく。何ふ流言を云ふ。一ふる人。見ハ往人
の知ふる所ふ。いうさ人ふ年ふ。
あるまじ。飛頭の事ハ物志搜神記ふ出ぬ其ふ異也

○酒を及同上

東西洋考に云占城國の人酒を釀し醸熟
る或候て賓主かの甕を繞て在り三尺ば
かり竹筒を挿入く揚次に吸盡し未いま
だ水ぬ生ぐ是を吸に酒の味ひ甚て美
とふ。外國竹枝詞

三尺竹竿輪灌酒

かく泳ぐ人ハ是なり

○金塔の中ハ妖精　真臘

真臘國ハ占臘と称し亦柬補塞とも云。占城ハ

西にして應帝亜ハ属國なり至大豪富國なり
加唐山の諸に冨裕を稱といふ。竹枝詞に

富貴無及真臘强

とうたへ泳ぐ人ハ城の周圍二十里ばかり。宮室の美
云沸を絶ことなり。真臘風土記に云宮中に金塔
あり國王甚く其上に卧す。塔の中に九頭の蛇精
ありて女身なり。已に土地の主なり。すなはち每夜
主と交媾ス其妻といへども敢て入事なしと。二
敵の後宮に帰りて妻妾と同じく睡る時の妖
精ふたぶる時ハ國王の死期なりとい

蕃主一下夜行されど。たちまち災禍を獲とぞ。

○直臘氏服飾　同上

風土記に云。國王は以下。男女いづれも椎髻して祖裼あり。布を以て纏頭囲む。牛八ばかりの猛卷の上に一條乃大布巾を繞し。此布は等階あり。とりわけ百姓は女子ばかり。此大布を用ゆるなり。王は玉の用ゆるものは直金三四兩ばかりの物なり。極めて華奢精美なり。多く暹羅占城より獲る代用は西洋より織るを上好とす。なり。國王は帽より金冠を戴くなり。冠を加へざる時は茉莉の花を採り繞らせ。ほそ結び垂れ。項の上に大なる珍珠三行ばかり。巾裁く。足は巾を以て跣足なり。華夷通商考に中略。貴人は男女とも蹠に金鐲をはめ。指に指環。さらに金を以て檀麝を塗り。手心と御底とを紅なる茅にて赤く染められ。百姓は女子ばかり染めて赤く染めて

○寺に竈無し　同上

同書に云。僧を芋姑といふ。剃髮して。黄なる衣を偏袒右肩に着し。腰に同色なる裙を繞す。是は婆羅門の跣足なり。毎寺は庖竈なくして堂の中に紅

の衣を穿る。釈迦の如く狀乃佛、或安置し朝る
小泥洹以下、傷る丹責を以て塔中乃仏八
綱を以て縛るもあり。鐘鼓繞鈸幢幡宝蓋
はたぐひ張くたり。仏八皆魚肉を如ふ酒八
決して飲ず。仏るも魚肉或供寺中ノ厨も
竈もなし。日〳〵も斎八法斎主の家より弁て通
らる。和の経巻八貝葉を畳て 貝多羅樹の木の葉なり。 齋整ノ仕
立るの上へ行ても也を出るや速と経文紙を
文字八回鶻字なり。 此回鶻八、唐府の文書より手ものちの
小紙ひてさるくノ試。白堊のぬき物ノ上ノ文字八上ノ下へ書下ノ下ノ上へ向てちらる

○雪隠 同上

同書ノ云土人家毎ノ小坑を堀て溷と也。糞満れば是
を填まゝ別ノ坑或堀。此玉ぬて八ひさきを畑ひく。田畠ともノ糞を用ひる也。和ノ溷
ノ登て既ノ畢ル所八。池ノ入て尻を洗ふ。故て不清
のるも和八尤の手或用ひ。右の手八飯を拿て喰ふ
故ノ。此地八張泊の唐人溷ノ記りて紙を以く
尻を拭ふ。土人ノ云ク朝天ノ人ノ中良業る
ノ。風土記の或或閲ノ云ふ真臘人大抵八黒ク肌ノ
穿人のぬきノ云ふて八其毛むのぬく白きものあり。紅毛雜話ノ記る烏鬼厠ノ
出て尻を洗ふ糞ノ多ノ合セ又ノ。又右手紙ノ

たゝ城池志むしまし。此江と異なり。是ハ地方小
なれ。ゆゑ人の下人とこゝろ日ぶ
へ事なきあるべし。

又葉〻〻。ちゝ〻〻。東の西ハ。ちゝ流ハ。
夜ゝ之ゝ。北の土人ゝ〻〻。ちゝ流ハ海有る花

○真臘人の澡洗　同上

同書ニ云。土地ゝ〻ぶ。ゝ〻熱ゝ〻ぶ。故ニ土人日夜ゝ
城浴ゝ〻ぶ。浴室盂盥の類有事ゝ〻。家〻ニ
池を堀り。男女ゝ〻ぶ。裸形にて池中ニ入。婦人ハ
左手ニて牡門を遮のゝ。されども父母ゝ〻ぶ
ゝ〻年人池ニ在ゝ。子女早幼ハ斟酌〻て敢て入ラ
ず。子弟の池ニ在ゝ。高年の人ゝ亦志ゝ或時ハ

城中の婦女二〻五〻て城外の河辺ニ至り。揚ゝ繞ふ
布を脱去。水中ニ入て澡洗ふ踵ゝ頂ニ〻ゝまで
いまゝ〻ゝ。動ゝ〻れ共人数千万〻〻
数ふべ〻〻。内ニ府第の婦女も交ゝ〻ぶ。庶人
此地ニ旅寓ゝ〻者。されを以て遊観の出ゝ〻大
抵堤防の大河日〻て山事おゝ〻ぎゝ〻ゝ〻
ゝ〻。河ゝ〻ニ溢ふ。て湯のめ〻〻。惟五更の比
微ゝ〻冷ゝ〻れども日出ニ。又温ニ〻ゝ〻ぶ。
土人交接の法也。ゝ〻ニ入ゝ澡洗し。剛ゝ也。亦池ニ入ゝ休浴ゝ〻ぶ
ゝ〻ニ。剛ゝ〻ゝ者ゝ〻ゝ。亦ゝ〻ゝ人ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

○送葬　同上

同書に云人死られぬ。筐席の形を以て包み。布をもつて是を蓋ふ。扨彩輿は吠ハ旗幟をもて。鼓樂志て送る道ゝ米の炒ゝをを拋撒もて。夫より墓外の人烟もれる所よ葬る。死者を引出して其形を棄れぬ。犬烏のたゞひ群て来て。忽ち合ひ啖ふ子弟されを見て怪でいらく。父兄生れよ福あるの初よ此善報を交とて。合ゝれぬ愁ていらく。前世の罪滅せるが故。此惡報を交とす。ゝ忌彼れ制あるゝ。男子ハかしらの毛を髡。女子ハ顱門の髮を剃る。

殘の大ハ此ゝ。是を以て孝とするのみ。

○陣嶽　同上

同書に云土人女子を產る時ハ父母ハ祝ゝて いゝく。新ゝ八汝將来。千百人の丈夫よ見あるを。を要せとゝをゝり。此地の婦人至て多淫ぶしゝ。富室の女ハ七才より九歳を限て貧家の女ハ十一歳までを限ゝて。傳城清ゞ道士を乞て童身を去ゝ。名付けて陣嶽といふ。けゞし官司毎年四月ハ内一日を擇みて。陣嶽の日と定ひ陣嶽を行ゝと欲する者ハ。皮囊一箇ひ出れぬ。文庫の

上巨燭ゑ刻畫きたる式あるふ。れを行ふ長け燭を
點し火刻画の如く燃るを陣鍛の時刻とする
なり。彼定日より一二月も前より。女子は父母ハ慶く
の寺觀を訪あるきて。保結の人を擇ぶ。有德の俗
道人ハ大抵官府家室ゑ出入ありてなりく貧者
なりの多ふ及ぶとなり。粉の中に酒米布帛擯掃
銀器は乳。掃除ハ塵埃の厚成交ゑを藏醬とひ。又賓門藥錢とふ。ほ〻ハ酒肴
みして多をとり。一盞を注ぎ。出て此を出ハ皆用ゆるなり。長崎
ゆる遊ゑ客ふとなり。なして其者の味ハ必ゑられを出るなり。お茶細目南方草
木状ふ載ふ。五彩組ふ西德式拳く。碗ふハ能碎ゑ碎ふハ能碎ゑ。儀ふハ能
飽ゑ。飽ふハ能饑ゑ。ひとなり又東西洋考ゑ云。白城
玉出ふ味ハ。掃除盤式持ふ者若ゑふ多ゑ。唐山の銀目ゑ積りて二三百
女色物を賣る。勿論家の豊儉ふ通ひて多ふ行ふとい。

家あて。此俗物の無しふきよりて。女子の十
一歳ゑ及ぶまで。未式のなるなり。まゝ金銀を掛て
貧女の陣鍛を助力とする人あり。是莫大の善招
なりとふ。保結の日ハ親族迎婿を集て大ふ
宴式設け。黄昏ふ〻れバ轎籠を迎へ鼓樂し
て侍を迎ふ。其中緑帛ゆく粉ひふ床二脚を
設く。一御ハ是ふ立ち女式。在せしめ一脚ハ別侍式
在せ。むゑ。夫ふ。在客鼓樂して酒を酌む
うち。巨燭の火刻画の如ゑ多れバ侍女と俱ゑ房
ゑ入る式設く。幸ゑ刀を去ふ。実ふ交媾ふ

いんと。華人よりこれを紙巾にしれど。そもそも詳
よせざりとなり。毎年春初を取て酒より納父母親族
これを額上に懸し。或ハ口づゝ嘗るともいふ。
天竺きよりのちんとるるかひよ迎来りて
所のぬくふれとるめて信を寺中より送る所。
他日女の両親。布帛の類を調ゝ彼信の浮へ行
始て紙贖ふ。たゞきふ。ハ生涯他へ嫁する事なく
とるり。陳鈴の前まで。女子紙去親の傷より却て
陳鈴を後ハ房の外ふ伏志めんの傷より男子より接
ハ志ひ。嫁娶の時。納幣の式ハ。いとゞも。されハ

甚簡易なるもなり。多くハ女子にして後娶ることあり。陳鈴の妻ハ一巷の中ふ十軒傍も有るもあれど。
傍の士紙近き人数来行西行より交錯。較楽の変
度ゝして丈ぶるもるゝ。中良業ふ三才
圖會ふ載る説ハ遠くより。女子生て九歳より時。
即傍紙請ふ傍經を誦し。梵語を仮名紙りて
刀を挑損し。寺号良庵が和漢三才圖會に此文を引て。ちゝの子を
挑損せしめと訓を付るハ誤ハ。也ハ名目なれバ。
やすり字ふ傷付きが。
ちゝ〜〜ん。甚紅を取く額ふ点じ。毋もまた頭
に匙ぜ。嗅ぐ利市と乃云云。此説ハ誤るる
ふ似ゝり。利市ハ暹羅國ふて。燈明の時乃礼るり。四

もくさく事も似たるよう。利布と陣鈹を混じたる
為也。次示記也。是眞國略れの 外國竹枝詞の注。東西洋考等
説。いづれも陣鈹と利布と八異なる也。

○産婦　同上

同書曰云。婦人出産の法あり。熱飯を濡紙抹て隱
戸の内に納一昼夜おきて除き捨かくなるべかふ。
産後忽平日のめぐ。生上産門收斂て。多産の婦人
も。常小室女のごとしとなり。周達觀。元の世の人。眞臘風土記撰者なり。
かりて果試疑ひしが。後彼国に至りし時。猶富セ
し家の婦人。衆中子産を生。次日ふるり。産所の

嬰児を抱きくと傳の婦女と俱に。河に澡洗なる紙
元て。始て産婦の安寧なる也なり。此
國の婦人八多淫なり。産後一夜を過れば。夫
夫と交合。まこと連添和の丈夫虚弱なれば。淫慾
を恐よする中らされば。妻の方より男性元作り。
決絶を乞いるとなり。生婦なるものそなりて
よく産育する。玉門を開き。産を裏る
事も亦よし。二三十歳の婦人八唐山なれ西五十
歳の女子性めしとなり。

○兄弟交合　同上

同書ニ云。東門の裏ニ住る主婦人。その妹城和尼
とのあり。皮肉粘て離れず。三月を歴て死しける
とかや。吾　邦伊勢の神領を犯せる者。かゝる神罰を受る事あり。恐るべしく。

○天獄　同上

同書ニ云。爭訟の曲直城矢をもて結ばるゝものハ。城
中ニ十二座の石の塔あり。公事人の告人被告を
一人づゝ此塔の中ニ座せしめ。両家の親屬ニ示し
城隍防らしむ。かくて一二日あるひハ三四日の内ニ
犯分なるものハ。才乃中ニ瘡瘢を生ずるの歟

ゝ。熱湯城ハ沈めて。形ハ生絹を穫。理なの者ハ。
纖もなし。かくて城汉。邪正を判断ス是と
なづけて天獄とかゝ。

○熱湯城探る　同上

同書ニ云。人家物城ニ入ふ叶。まさに盜人ならん
とする人を吟味するニ。其実否分明ならざる叶
ハ。湯城沸しを。その人をして手城伸て探ら
しむ。盜ならぬ人ハ。たゝ形ハ腕膚爛ず。逆ざる人ハ
皮肉ともに爛しとかゝ。吾　邦の探湯ニ似たり。

○鬼丈　同上

同書に云。此國殺牛禁ぜず。丈夫牛を殺す時ハ。紫二本ふ。爲丈の足を狹て足を綾る。生て痛苦ぶべからず。姦夫資財を出して正妻ふ。ハ納得して事なとなるり。此國主より の制禁なれ。殺すまる仕なるり。

○牛肉喰ハず

同書に云。馬ハ玄矮くして小し。牛ハ甚多く生ず。若牛死ぬれバ敢て其肉を喰ハず。又敢て皮を剥ず。只其のまゝふ。屠物せしむる而已。いかる外人と與ふカを出さず。

○華人ハ臘ふ逃る

同書ふ云。ハ臘國中衣裳を着ず。その上米穀求易く婦女ハ屋室造り易く。器用足易く。買賣ハ爲やすきが爲なる。水主の唐人此國ふ逃て者多しとなるり。

○楊枝　同上

隨書ふ曰。直臘人毎旦澡洗の法を。楊枝を以て齒を淨め。經文を誦して後。ようやく澡漑。丈より食を喰ひ。手を以て喰ひ。楊枝を以て巨を摩。又經を讀とるり。

○婦人智多し　暹羅

東西洋考ニ曰。暹羅ハいあ（赤土）ト海路剎地
ト云ひし地なり。暹羅船。時ニ行テ長崎ニ来れば。此国の
婦人ハ志量男子ニまさる故ニ公の政事より自余
のすべてにいたるまで。悉く婦に計る。其裁決ハ駐
ところ。婦人ハ紙ニ旅泊の華人をそれぞれ
ハ試ミす。置酒て款接し。留宿セしめて押し
つぶ。夫も禁ずるもあり。竹枝詞ニ
女兒斷事男兒聽　偏愛華人夜夜嬌
と詠ぜり。同書の注ニ云。華人を愛する婦人の
ゆゑと。いさゝか如ようなれども。吾書美なるが故ニ

中國の人も喜愛するとなり。

○陽物ハ七寶ハ餅

五雜編。おもひ國竹枝詞の注ニ云。男子年二十歳
の時。陽物を割て金銀珠玉ハ鈴を入るとなり。行時ハ鈴と
以て対ニ。さも象嵌ニ入るとなり。
して故あり。又三才圖會ニ云。男子幼より
陽物を割て八宝ハ嵌し。ひく富貴ニ衒ハ
ざるなり。女をあ（て妻とせ）ざる家ハ
二ハいさゝか異同あり。中良案ニ南亞墨利加洲
中の孛露國ハ人珎寶ハ以て面ニ小山嵌さると表裡

の後なり。

○鳥葬　同上

東西洋考に云。貴人死すれば屍を水に浮て灌す。高埠に墓を建て塔を建蓋をかぶせ貧家は鳥葬す。竹枝詞の注に云。人死れば戸を閉て海辺に棄て犬に食はしむ。其骨はこゝかく海中に棄れば鳥葬といふと云なり

○暹羅國の婚禮　同上

同書に云婚礼の外は男から辭令婚礼迎て女家に至り侍女の紅紙を以て婚礼の彩を敷て吉祥と云。竹枝詞の注に云。侍女の喜紅紙を討て男の家に敷て名づけて利市といふ。上の説といふて遠し。

○聖鉄　同上

此國の人性勁悍にして水戰に巧也。將人の腦骨をとつて身に佩て聖鉄と名号して聖鉄といふ。刀矢も入ざるなり。星槎勝覽に曰。檳榔の木を刻て標鎗を作り。水牛皮に漆して牌を作るとぞ。

標鎗八此近國。眞臘、占城とも。中良嘗て聞う。時偶海を渡る
暹羅人蛮船華舶よ物産をとりかくし
こゝをよあるべきなれば。斧を拾ひて海底球潛う
和尚産物破るゝ。其性の猩猩なること
水絲よ熟、しるハ。是産りて知べし。
右占城眞臘暹羅の三國ハ応帝亞の屬国よ
しゝく古中華へ入貢する地なり。北方唐土
の西小西洋より。花蓮的印等よ。西洋東洋土地行の蛮書
なり「ハレンテイ」ハ昂記者の名産書月しゝなり。紅毛人の説話あり。
いんどもさまでの珍説を得られハ。たゞく

華人の説一二件拾ひて。是巻の看り
呈する而已。

萬國新話卷之三 亜細亞海嶌之部

東都　森嶋中良　編輯

○瓜哇紀傳

瓜哇國の都を「ハデイヤヤラン」とゝふ。國王一日筵席を設して。大に雜劇戯をなさしむ。こゝにて殿の外小一チ人の童子盤桓ゐり。忽管弦の音絶て。甚場よりあること一チ後ゝ。ゐくつひ守門みちゝくの中に入バ守門の長叱して曰彼度

汝めき少年者の注屋に有るあるべと。眼にて
走り走て睨みしに。彼童子ことごとくせで微哂
ていとゆゆしき面ゆゆしき。我躍越ても
彼所に到るべしと。頓て殿の門に入ると。元来
此童子の父は鍛工の長にて。此家に居合せる
が。此様子見るより。走り寄て引留め或は叱り
或は宥めて留めんとすれども。つとも丈夫にて振
放して殿門に跑入り。彼新劇の場に行んとも
しがりとて不柔門のもとにて。遮て
遮へ。後堂の方へ引てゆくに。堂上の中の

器を飾り。名付て「バルサ巴山」と。此制度つ多し
此堂にも国中の重器にして。国王の命は
みだりに敢て変ぜざる故なり。
彼此童子と齋に。堂上に坐して。打命
傍りに人なかりしかば。思ひの侭に脱毒し
ける。時に國王は新劇を見て大に楽し極る
而。たちまち彼楽器の音絶て大に驚き。
何者なれば我が堂に入て悠に敢ぶやと。急に人
を遣はして是捕へんむ。官人等こけまろび
後堂に乱入。我勝に彼童子捕へんとて。童子も

騎うぞ。力試振て皮人形拒れぞ。大勢の皮人ハ云甲製もあり追立られ。後ハ人をて逃げ疲らう。國王ハの猛ハ人ハ何れも顔面手足ハ重傷を帯るハ。玉王ハ宮中の長官小岡て曰。彼童ハ何等の者ぞ。かゝる勇猛の働ハ有るもと。「マントーリス」て。長官の名　達んで。彼ハ鍛工長の子ぞ。と答ける。國王廣王ハ命ぜて鍛工長ハ召出し。彼ハ鍛工長ハ召出し。彼小皮者ハ微臣ぞ子「左レグワナラ」と申ものぞ。と答ふ。国王曰我こゝ子細あれバ。汝速ハ彼小童ハ連来べしとありれバ。鍛工長かしこまりて御前ハ立。即時ハ「ワナラ」を召連来る。国王の御前ハつゝ「ワナラ」おのゝ色もあゝ。恐れ気もなく立居ハ。くと居り出。恐れ気もなく立居ハ。その時國王問ていハく。彼ハ実ハ汝が子ぞ。や。鍛工長答ていハく。実ハ臣が子ぞ。伺ふ。國王又曰。汝いまだ妻ハ娶ぞ。ぞ。近ごろ一人の妻ハ五拘へ居あれども。其日数猶僅ハ。然るハ斯ぞ男子

有て。志ろもかゝる振舞ハ。銀工長叩頭して言ヤ
とあるりれば。銀工長叩頭して言ヤ
けるハ。誠彼小友者ハ。新族の子孫者取て。
臣ゝ子ともゝ仕ふなりと。國王曰。志ろもば
汝ゝ子。かゝのめく長大めして志ろも陳
勇ゝ。今日より我宮中ゝ召て召仕ふ
べしとて。やがて「ワナラ」を堂上ゝ召て召
れける。銀工も内ゝ入ハ憂を抱いつゝ。外
ゝ出て。此段所縁あるべし。恩をみして退
出て。（原文編を支より「ワナラ」國

王ゝ近侍ゝ召ゝ僅ゝ二月。其ゝ後近隣
の國ゝ合戦ゝ有けるゝ。やがて此所哇國ゝ
襲ひ來りければ。国王「ワナラ」を軍持ゝ
て。戦場ゝ向ハしむ。「ワナラ」戦ハバ必ず勝。攻
れば必拔て。敵ゝ追ハ入ゝ。ゝ。許多
の州縣を攻取。数多の賊宝を分ゝて凱
陣ゝ帰れば。國王大ゝ悦ゝ思ゝ召て彼
を寵ゝ召ゝ給ゝ日ゝ十陪ゝ。遂ゝ「ワナ
「」ゝ対して万人を統る長ゝして。「パテ
イヤ々ラン」（都の名）の内「パワセル」（地名）の北の側ゝ居

任せしむ。其権勢。此國の執政「アリヤバン
ヤク」人名あるもおとゝざりけり。此一アリヤバン
ヤクライフテ」なる者ハ。瓜哇国の諸臣多き
中にも。取りわけ貴重せらゝ子細ハ。元来
國王の子にして。廣王の列なれども。今群臣
の長として。執政第一の人なりしなり。さて
よ「バンヤク」。久しく封を辞して都に返
し。國中の政令をとりて。或日國王の御前
に出。願ハくハ國中の微エをことゝく我
宅に呼集ち。一ツの軍器を製せんと願ひと

請ふ。父の國王許容ありければ。「バンヤク」もと
ゝ國中の細工を呼集め。軍器あハゝず
して一の鉄室を造らしむ。さも一日の内に
功を成んを要とす。是何か小軍器をハ制
せずして。此室を造るとゝきハ。「バンヤク」久
しく不臣のこゝを懐き。父國王を弑して。
おのれ「パテイヤマラン」の國王ゝと欲する
きざしあり。故に機密の謀を設けてこの
室を営むなり。さて昨日迄歴々おのづ
から外人の洩せんを恐れて。一日の中

ゐハ成就セ〳〵むるあで有けり。既ゐ其室成
けれバ。「バンヤク」種々の珍宝を挑列し。林
帳枕机の類。金銀珠玉を以て飾り立。
その上名香数品を具して。一室ゐ薫じ
満〳〵けれバ。一ゝび此室ゑ入るものハ恰天堂
ゑ坐するこゝちをぞもりける。「バンヤク」ゑ
ゑ紙ゝ紙ゝ。國王を我宅ゑ招待せんゑ
を請ゑ。王即時ゑ駕を促して。彼宅ゑ至
きバ。「バンヤク」孫行者を迎ひ出て。
伐拂て。山海の珍味を盡しけるあで。王を

もてなし陰侯の緒后。各歓笑ゐて酔を極る
時。國王偶屋上の新室を見て。「バンヤク」ゑ問
て曰。彼室ハ何の故ゑ造〳〵ものゝと。「バンヤク」
答て曰。彼室ハ比丘ゝ寢室ゑ造る而ゐ
て。暑き時彼室ゑ入バ。自ら気絶せし。冷
〳〵ものハ生暖ゑ。暖〳〵ものハ生熱。飢〳〵る
ものハ生飽と。王駭て〳〵。之所の如き其
奇なり。我暫く入て試んとて。即彼室ゑ
入るれバ。「バンヤク」計ぞゑ成ぬと大ゑ悦び。
手早ゑ彼室の戸を閉ぢ。鉄室の四面ゑ薪

を積事山のごとくあつて。一国より大火をとりれハ。修煙天に聳えて燃上る。陪従の諸臣共ハ驚といへども。悪く「バンヤク」が猛威に恐るゝ故。進者なく火中ゑ跑入り。王に救ふとの一人も無りける。良あつて國王燔肉のごとく焼死しける。河川出さる。「バンヤク」妻を励まし

河の名

していつて曰。凡人たる者。いさゝの債と雖も。借ることの八必ず返さるといふ事なし。我幼き時父國王のゐる「カラバンヒグ」河の名の水中ゑ投入られしより。此事和編小出さるべし詳なり

今その債に償ふとて遂ゑ其屍を「カラハンヒグ」に投入しむ。陪従の臣下おのゝ水中ゑ。「ヲンガンダガ」といふる者。此席に忍び出。太子「スースルーピ」の宮ゑ来り。大ゑ號泣して事の扶を告。太子大に驚嘆し。たちどころゑ宮中ゑ外の兵士に使し。「バンヤク」が宅へ馳向かに。こゝや國中の者ども悪く「バンヤク」が威を恐れ。太子の兵卒数ゑ毎ゑ敗北。四五日ゝ程の戦ひよ。近臣のこゝで討死し。太子一人とゞまりける。今ハこゝや孤仗ふく

所より東方より道をこれ公田くも只一人千磨百經を凌ぎて。やうやく「カリグンテイン」と
いふる縣ようこそ〻い逃き出り。爰より一人の老
婆あり。名は「ニヤイランダカリグンテイン」と
いふ。素これ國王の妾あり。て。老子「ストー
ルーゴ」は産まる後人より嫁し。此所より住居を
かせり。老子先此老婆の方は休め。好復雙の
膳をこそ碎きりり。扨も「アリヤバレヤク」ハ父
國王は就して後。「パテイヤミラ」より居住し
て自ら此國王と称ずるよ。人敢て及く者な
し。此はきるふ令は「ニヤイランダカリグンテイン」
子「ストールーゴ」を偶宿せしめ。あるひは
を以て扶助し。合力をなるものあるハ諸を九
族より加へ。ことして。老子を拉し求むる事
嚴密なり。「ニヤイランダカリグンテイン」或日用
変あり。「パテイヤミラ」の都より出しが。此制
札を見て一驚は吃し。慌忙を家より帰り。
子より老うくの中は語り。且三人の兄弟国
イウイラサリイ「キヤイバアデル」「キヤイタムビ」

等と高低して。左子武逃れ去りんとするを
留るあど。「スースールー」ビ人そよ向ひて曰く。
たとひ鉄骨銅皮あるとも。一擲の金丸に
「アリヤバヒヤク」が大軍か敵せんとすおもひもよら
ぬ。彩武避て他邦よ赴き。所の至るを待べ
しとて。即時よ山地を去んとせ。四人の者
頻よ別れ惜みて。時く左子武棄るよ忍
ひず。彼是百人ばかりの人を従へて左子武
附添ひ。何度武尚と云るもかく。そこそこ
うこそ落行りる。かくて数日武歩行る。彩

らして「クームバンヒ」といふる山の麓よ着ぬ。
人そ此山よ登んとすれば。千るよ路くなる。嶮岨
なれば木の根よ攀ぢ岩頂よ縋りて漸よ
攀躋る所よ。たちまち一陣の大風起り。雨
ハ盆武覆ちがめく。木を拔石武飛しつ。電
光霹靂おびゝ赤く。山麓も碎飛。天も破
るゝばかり。是何の故なれば。此山上よ一
人の妖婦あり。名を「ニヤイテヤンマラトウンガ」と
いふ。天下の妖怪悪鬼の類を統従へて。此山中よ
住れ住る年久し。今此風雨雷電ハ衆の

妖怪等。「スースールージ」以下の人々。此山より入る。彼妖婦より告知せんとて。呼喚する事あり。人々肝魂飛て忙然として其形なし。何処となく一聲の振鈴の音響くと共に。忽雷電快晴せり。史記人々驚き励まし。山の頂より到りて見れば「テヤンマラ」の大木。（木名形状未詳）森々として生繁せり。不思議や其樹の陰より。美陰の人を発せ一行の人々大に驚き怪みけり。老子おもへらく予影てり。此山中より「ミヤイテヤレマラトウンガル」と

いふ仙女ありて我等。此木の下に来り。頃刻にして自言自語する所より。思ひ
もよらぬ彼木の下より大光明放て眼の釘線を刺し。思ひもよらぬ白髪の僊女現れ出る。
老子驚き地上より跪て曰。大仙我「スースールージ」道士の為に困阨して此所より来れ
り。願くハ教ゆ給へ。仙女曰。若我汝が来
まるを。去ること今汝が兄弟「アリヤバニヤ
ク」一味の勢に乗して威権甚猛なり。更に汝
を苦しめ不ふあらんぞ。我も亦汝を救ふ事を

得ぞ。然ればとて後来の為に拵ぶべし。前々第れ詳なる是れ汝に渡さん。汝今此山
に去り。物も語を乗よ取りて旅行せよ。彼の
数日あり。一株の「ポーンマテイヤ」と名付る
木に見るものあらん。（木の名形状未詳）甚実に美味ひ玉菩かるべし。甚樹ある所を都と
建て。百神擁護の地なれば。父国王の誓言
に数ぞるのみなれば。子々孫々に至るまで永久
に汝哇国の王位に保つべし。特且に書れ
前過のごとく汝に来る。汝い

大叔母あり。汝の弟祖父「ムーデイングサリ」
の女なり。我が「ポ」。瓜哇国中の諸侯容
貌の美麗なる者を選び。各あらひて妻
人と欲し。妻問ふ者あるべし。密
に一千人の女子と相約束して依りて。
敢て衆人の妻問に応じ。応じて後
衆諸侯怒に動し。遂に干戈に及び
ら。合戦利なしして。雙親難に逢た後へ
て。我は其時より此山に入て。年を
須臾を思て。こゝに世の者とされ

至と。語り終りまよく。こちまち立離こち
老女の形に変じて。悼約こち美婦人とる
ぎて。其容貌実に絶代無双にして。嬌氣
人に迫ぎて左子甚精神恍惚として心
気なく。都て前後のこと辨ぜず。一意に其
美貌に惹られて抱擁し。手に捉て
感ぎて。忽然として又こちめの形となれ
て。左子心始めて覚悟し。大に魄大に愁地に
伏して罪に謝す。偽女曰。あえて怒ることなか
ぎ。ただ此身人の道に悖人なれば咸ハ

老たる姿に現じ。ぎこハ稚き者にて変化男
となり女となること。こちめて。長に
死ることなく。変化不測の術に行ること。
ハ是より南海「ブランデ」に一つの山の南「コウ
タ」に小都に築き。万国世界に名ある所の
妖怪悪鬼の首領となり。大事を決し
大軍に出さん時。必ず此名に呼ぶ。時に
なて守護ぶべし。こちやく此地を発足
せんと。忽に教諭こちて掌に指ガ
「スースールーグ」をとして一行の衆人

こゝ〳〵く拜伏し。即仙女の令かまさぐひ。東の方より路ゝ行しあり。仙女の教ゝ行ひ。皇女ゝ行ゝ行ゝ。「スースールージ」疲難して。一株の木下より憩息ゝ。地上より二三箇の菓実あり。是ゝ食へば。甚味ひ至て美し。此より於て彼仙女の言ゝ行ひ。今ゝ叔父「ヨイラサリイ」より問けるに。是ハ何の菓ゝ。此地ハ誰ゝ領地ゝ。「ウイラサリイ」答て曰。此菓ハ「マデイヤ」と云ふ。〳〵此地ハ「アステイヤ」と云て。則「マデイヤ」の屬縣ゝ。汝ゝ領地ゝ。「パデイヤヤ〻ラ」ゝ押ゝ。「アリヤバヒヤ」ゝ走ゝ。此ゝ彼賊臣の領地ゝ。「スースールージ」此言ゝ聞て。天より歡び地ゝ喜びていく〳〵。幸ゝ。叔母の教ゝ。不ゝ。地ゝ。紙王業ゝ奥ゝ。遠ゝ。郡ゝ建べ〻ゝ。名ゝ「マデイヤパイ」と改め。遂より此不より都城を築ゝ。近邊の人民を募集ゝ。前國王の旧恩ゝ荷ふ者ゝ。紙もくと

馳集る程よ。義ぐくもたくして数千の軍兵を引ひきつれ。いでや此時よ乘じて。逆臣ラボルを討ん。父國王の妾孤を略さんと。合戦の評議まちまちなり。去程よ「左ングワナ」ハ「アリヤバレヤ」國王を弑しまゐらせ。己が領国「パウセ」の地よ在て。道路くるよ隔てり多ば。此大変を聞ども知ざりしが。其後遠く「アリヤバレヤ」が逆意の事。左子も行方なきよ。骨髓よ徹て。

今ハ「ワナ」が頼むづき君も左子もましまさず。此上ハ「パデイヤ々ラ」の都へ攻入。逆臣「ラボルヤ」を誅伐。海後ふ如ぶ所ぜ。一ふ討元げし。忽よ曠野とおして。今の会合を為ぶべしと。たぐちよ下の軍兵共川辛し。不日よ都へ攻上り。霞食を忘れ息休も継ぎ。日々夜々よ血戦して屋勝利をはかりつくく。寡ハ衆よ敵しがたく。大國の軍兵なれば。切ても突ても尽ざるふこそ。中く一時よハ取挫きがたく

肺肝を摧きしが。此頃太子「スースール
ージビ」「マデイヤパイト」より都を建。四方の
士を招くと雖も。取扱もなかりけり。
昂味は馳参じ。「スースールージビ」より謁見
しられバ。太子一度は怒り。二度は悲び
ながら「ワナラ」より三千の兵を揚げて
「パデイヤマラ」より進発せしむ。「バンヤビ」
此中を出でも。遅兵をぐつて進
戦ふ。合戦数廻りして義兵遂に傷
利を失ひ。敵兵の麾下大将「バンヤビ」

を捕とし。一刀の下に命を殺りけり。此を放
て。「スースールージビ」他日の鬱懐一時に啓げ。父
國王の神霊を慰さるる事得べしとぞ。
して後。其弟ハ「マデイヤパイト」より都城
を奪て。瓜哇國王と称せられ「パデイヤマラ
ビ」ハ。其子「パンゲランアリヤパヌーラビ」より
て是を治めしむ。三人の叔父に執政と
「ワナラ」より扶ふ大臣を以て其弟の
官職盡く備りて。瓜哇國全く平治
新國王の徳化より麗き浸ひけり。其後年

を歴て。「スースールーグ」病に係りて神去りれば。其子「パラプーアノムロワリング」パスサル」是より嗣で爪哇國王と称せられけ
ゆるとぞ。

此一條ハ「バターヒヤス」ノードシカップ」と
いふる書中爪哇要録と云義なり「イヤワーンセヒストリ
」と云へる條紙。亦良庵前野達が
譯しる。「イヤワーンセヒストリ」ハ
爪哇紀傳といふ義なり。其總目録
ふる。第三條と。其一二の條紙脱
せり。故に起牛の来歴紙詳に其を
云ふ能はず。

○竹鎗會　爪哇

方輿勝覽。ひとし外國竹枝詞の注に云。此
國十月を春首とす。竹鎗の會といふる
有り。夫婦塔車に座して會所に至り。夫
ハ偶を乗りて各竹鎗紙執。妻ハ子を抱
アの木棍を執て其中に立。鼓を鳴紙
號とし。鎗紙交車
の妻。彼木棍をもりて
を防て那

刺那刺しらしめて。即ちのまゝ退殺
す。若突殺さるゝ者ハ。國王より
賜ふる者よ金一箇。死者の
家よ与へしむ。死しゝ者の妻ハ。縁
ある者よ随て去らしむ。王も妃とも
もよ。車小乗て會所よ出られし。

○聖水　同上

此國の海灘よ小き池有。聖水と名づく。元
の將。高興。史弼。此國征する時水よ之
しらしめて。天祐を禱祝し。鏡を

地上よ突立まゝ。泉湧て涌出せしゝ。
我朝壺井の清水と同日の談なり。

○巴旦人日本へ漂着の始末

巴旦ハ大寛の南に當りて。天竺よ近き嶋
なり。延宝八年五月十七日の夜。日向九國へ
十八人。家の異國船源次郎ハ者なり。夫より
翌五月十八日。於王伊豆ハ嶋出雲ハ國より
送らる。幻鎮臺牛込忠左衛門殿へ
らしめて。十名寺御菜園の内。唐造の
具式入置る。式間深さ六尺ハ小家のゝ

波漂客紙者亦毫。扨亦紅毛の流を
くじ免。ある中の古人よ命ぜられて。同
せらるれど。些も云語毫ぜざるか。行の
人とも知ざりし。所茶碗茄手入汲水野
小たゞつかるものゝ。女芝ある男ゆて。多
盟小多紙港へ小石を以て嶋紙をあし。笹の
葉の舟よ土偶人紙を乗せ。水よ浮べ流せられ
ど。漂客ども合点して。拝て嶋紙を解る程
けるゝ。まさく方位を正し。日月星辰の
形紙解りて昼夜紙分ち。物も船路を知

ゆれば。異國人つぎふ仕方かしりて紙。遂
一地圖小燭し見て。巴旦人なるものを発る
し。絵墨へ訳と告しられば。牛迎氏大ふ
感公ありて。小たゞつを巴旦人紙りと定めら
きゝ。漂流の巴旦人。姓名左のゝし。

ヌマチイ　二十五六歳程
スイモンクイナムアワク　三十一二歳程 疫死
スイモンマットバク　三十四五歳程 日比
シタヨムナワク　二十歳程
マトツポ　五十七八歳程 病死

スイモレカラム　二十二三歳程　病死
スイホウ　五十七八歳程　日乾
シヤウロタワコ　十五六歳程　日乾
子ヤス　二十四五歳程　日乾
スイモレトワク　三十三歳程
ケムライナワク　三十二三歳程　病死
ラワクウ　四十四五歳程　日乾
スイモレカワカウ　三十七八歳程
ヒハクランナワク　四十四五歳程　病死
スイモレアワ　三十一二歳程　日乾

セイダイアワク　二十二三歳程
スイモレムスリ　二十二三歳程
スイモレカラムナワク　三十二三歳程　病死

右十八人の内色黄白なる有。黒きあり。所八悪なれども。剃髪きれいなり。剃髪されども。背の高サ五尺五六寸。衣服日本の風儀なのゆへ。中良素ふ是天竺みて名もの用ひにて以後多べ冷気の物よろし。木綿布子沢あり。へられ申べ。残らず孫沢技去。袖無の襯衣制して帯せしもの。褌八幅七寸斗の

巴旦人之圖

耳より掛るれハ立山の廳へ
えじめて呼出さるる外
切戸口ハ
入時一度
十八まての数字ハ
書さる上耳無へ
さる仁書の巴旦人
と呼て支を無ぜ
られしきん仁

また耳珠より環ハ
入る完ちし
ちなり

木綿あつて。織目よまぐひ糸にて織るの掛紙
あり。唐山製の刀紙佩。煙草煙管八日本語
と同し。文字有。横小書也。中良著々之天竺ニて用ゆるコレイヒ文字なるべし
持渡りたる蜀黍の移植六月為。九月より至
まぐ。丸にて喰ふ。仮れ焚法日本と同じ
ゑし。但し土鍋あつて炊なり。結髪の命
おようて。死しゝる太をあるくれば。たゝ
焼めして小刀にて切り。水煮めして食ひ
ゆる。菓子ゐどあるゆまぐ。人数より切り砲
て合ふ。或時ハ大木の枝へ。細縄めて器紙を。

煮紙丸て毛を引。ゆ煮めして食ふ。木
に登りて八橋のゆく。海より入て八移のゆし。
寸法ハ。長サ二尺五六寸。横ハ尺ばかり
刻物の箱を壁より立て。紙ものを。
毎年ゆ紙浴。九月の比ふいりて。文屋
紙用ざるし。巴旦人ゐる返ゆ死
。（行きて崇福寺へ葬る）残ゆ六人ゆ帰れば。結
髪紅毛人を石出し。此者ゆ本國へ送て
をゆゆべし。迎ゆ後ゆ。蛮人畏ゆ。
ゆて。同年九月出船の節同船して出帆

志けるが。巴旦くも本國へハ帰らざるして。
咬嚙吧（カヲパ　爪哇の都なり）にて妻ハ具し。一人ハ泥水道
とかく。陸路ハ治者の加工となりて辰巳
年の加比丹言上セしとぞ。巴旦人の常
用船ハ。代銀百目ありて拂ひとなる。長サ六間
横巾丈五寸。前あてあげ。後汀ハ不
小舟なり。牆長サ壱丈八尺三寸余あり
とかや。此事西川氏の長崎夜話。及び
華夷通商考に記載ハ誤りなり。
右の回記ハ澤子より

加いさゝか異漏を洗。詳説ハ戸ヶ手輯
録の所の。海外異聞中に収めなり。

○老者を殺す　巴旦

巴旦ハ年老るものハ働悪しく役に立ず
して。親と共に打殺して仕舞ふなり。家道
優陵芋料を多く貯へ家内ハ
情なれるゆゑ。老者ハ養ふものも有と
なり。此國五穀ハ絶なく。芋を
りて糧とするなり。素より仏神をさへ
知ず夷なれバ。冠婚葬祭の礼もなく。人死

それハ畑のかゝゝ埋免。其源を踏平し
畑となん。

右の話ハ。寛文八年尾州智多郡大野
村なり。孫右衛門といふる者の船。巴且ふ
漂着し。移しの報難よ逢りが。幸
らして彼嶋を過て出。南蛮人よ
扶助せられく。日本へ帰アるる水主
どもの説なり。其記録ハ海外異聞
中ふ載り。

○甲冑　同上

彼水主ども巴丹よ渡海の写。彼國中「マナニ
ヨイ」とふ所と「ウサ」とふ所と俗を結び
て軍を起しける。鎧ハ牛皮もて作る。冑ハ木
を刻て鉢子ハかく製しるこの説なり。

○家作　同上

家ハ大抵九天梁よ二間とる。新のそきハ
三天梁よ作り。四這よりて出へ。長廊
風脇きよりて有り。客来ハ此内

へハ人ぞ。各門口ハ屋石あり。其石へ彫物を
なせ。扨さ百〳〵ハ数待ちたり。為て彩色
に釘を用ゆぞ。樹の皮を剥て拵る立屋上ハ
何迄も茅葺なり。根太ハ木なれ共ハ
作ゆく変物もなし。全体拵ハ
極て中も。日本の三月比の気候に用ひ
たるふうにして。國人多く八裸なりとを

萬國新話卷之三

萬國新話卷之四　亜細亞海嶌之部

東都　森嶌中良　編輯

錫蘭

○象人語を解す　錫蘭

錫蘭嶌ハ象多し。他の象と異なり。
能人の言葉を解。土人物を負ふて。某地
ハ至迄ど命令ればかなりぞ爽へぶ
て其所へ送るとも。他の象これを
遇へば。其ものの地ハ蹲て伏たり。

○桂枝　同上

此嶌の山林。おゝく肉桂、紙産也。土人刀紙ゝくを樹小畫を入外皮を剥去。第二皮をゑて日小晒を。其生るゝ時小黄白色ゝり。乾くよ迫ひくく両端を内よ巻縮せの色変して黄赭色をゝゝ。是茅用の桂枝なり。其樹三年紙歴ゞ。皮紙生るゝ枝のゝ。

○涅釈迦　同上

明史外夷傳小云。錫蘭國の海辺北山上小石

ゝり。石上よ一の足跡あり長三尺ゝり。是紅毛雜話中天竺山の條小誌せる佛足石比ゝなり。故老いくく。佛翠藍嶼ゝり来ゝく。同書中小瓜哇東南海中三皿の山あり總名紙翠藍嶼ゝり中長紫ゝ小錫蘭翠藍華音同別所小あり。此紙踐かゞ西ゝよ高存ゝ。井小淺水ゝりて四時ゝも小乾ゝど。人皆目を拭ひ面を洗ひ。仏ゝ清浄ゝ。ゝを山下小仏寺ゝり。釋迦如来ゝ眞身牀上よ側卧ゝ小仏牙。ゝび舍利有。五体小佛涅槃の處ゝゝと。其寢座ゝ沉香ゝゝ是を諸ゝ寶石紙ゝゝく莊嚴ゝゝと記ゝり。中略

の注に永樂中鄭和ことごとくして金銀宝幡を布施となしたる紙書せり

○人の血を浴る　蘇門荅剌

嶋夷志に曰。蘇門荅剌の酋長。毎年十餘人の人を殺し。その血を浴びて四時疾疹を生ぜざることなし。中夷第十古城王の人肉を酒に似たるものあり

○犀象と鄭和

「ヨハンブラア」が萬國畨説に曰。此玉比象きくめて大めしく能人より別。戒國に八陣不象紙用由又犀紙産を性くるぶ象を惜む。小なるものは雖ども能動に。其時小闘りんとする時八石上ゆく角紙熱象紙暖を突破て殺すなり。犀八大さ象より垂るものなり。その形狀主治八。伯氏著る所の和蘭菜選よりえんとす。

○鷹王　呂宋

呂宋地に鷹紙産る。天正の初泉州堺に商人納屋助左衛門なる者小琉球より呂地小別王文録三年彼地の産物紙鷹鳥象吉云へ余もしるあり内に有る王あり花咏もるかに衆鷹に出来る。或八禽獸紙得れば。鷹王まづ先睛を喰ふを俟て。然る後。群鷹其の肉紙喰ふ

となく　別人の説

○地球伊西把尼亞小集ハる　同上

往昔伊西把尼亞國ハ人（伊西把尼亞ハ歐羅巴中の一大國なり華人の説ハ佛郎機人呂宋を奪ひしと流説なり）呂宋ニ来ル互市を。或時黄金於てぐく球王ニ奉て乞ク曰。那八牛の皮ハ屋を蓋ふべけんど地を張ル人と。王曰ク。伊西巴尼亞人ハ牛ハ皮を数多續ぎ。數間の土地を皮ふく囲ひ。是ハ称ふべけの地球を乞ひけるなり。呂宋王ハ其を許ん乞といへども信を去

夷ハ失ハんるも黙止かざりしが其後ハ地を與ハ。伊西把尼亞やがて呂地ハ城球築き室球営み銃を列れ刀剣を置く要害を堅固ハ。其後遂ハ呂宋を圍て王球殺し。此図を畫く。伊西把尼亞ハ有とぞなるハ。今を伊西把尼亞の呂宋を。當呂利が大閤秀吉ハ紙袋一盃米球張ハんと乞しるし日の淡ル。

○男色球禁ぜ　同上

東西洋考ハ曰呂宋國狡童ハ禁を嚴ニ。

此地より来る華人犯すものあるときハ天ハ逆ふの罪人なりとして。新紙積て焚殺すなり。中良案るハ男色を禁ずるの法紅毛と和蘭商長を為て西洋の法紙用ゆるなり　歐羅巴中ハ伊西把尼亜より

○丁子　英　沙谷米　馬路古

家兄の譯説ハ曰馬路古の諸嶋ハ赤道の下にあり。其北方なる小嶋より多く丁子を産す。「テルナーテ」「チドル」「モチル」「マシアン」「バシアン」の五嶋殊ハ多しとなす。樹ハ桂に似たり。葉ハ中央に一筋ありて。葉の似たり。花ハ白く。後緑ハ孩子の萎く墮ず。色赤く堅まり遂ハ変して実となる。其形状釘のごとし。故ハ名て丁子とす。紅毛にて「ナーゲル」とハ「ナーゲル」ハ釘の変名なり丁子ハ漢人の義譯なり　花ハ緑色なる外。芳芬花の厚ハ所ハ有て其實ハ枝の際に攢簇す。此地法令なるゆえ畜獣なし。只羊と鶏とあり。かの給糧ハ牛ハ小之ちく。土人樹皮紙磨て粉とす。餅に造りて食とす。其樹を「サアゴウボール」といふ。彼餅ハ製しうるものハ。

所謂沙谷米なり。

○食火鶏　番達

番達はくるぶし小嶌なり。此鳥小異鳥にて。甚名を「ヒメウ」といふ。大さ鵠の如く。舌なく翼なし。羽毛黑く玉れ上ふ冠有り。其質鼈殼のごとし。爪ハ甚長ごく物小觸れて後さ直ふ跳る。馬の跳るが如く。燃炭磁器ハ缺とへども。扱ふ事ハ手を以て則食ふ。是「ヒメウ」なるべし。いまゆる食火鶏なり。俗人やきをそれで食火鶏を駝鳥とまちがへてえらるるものあり。此鳥

安永年間紅毛人（加比丹ハ「カピタン」「コンペンニヤ」の内と見えなる志まし）携へ来り公へ進献ありしが。後罪ふて刎せられしが。幾許もなく死しりしと。

○客歳蹄毒館なる第品會の時。医官田村氏。此鳥ハ死しりし。公ハ是を飼りしりて。其席へ出られぬ。

○唐泊浦孫七勃泥へ漂着の話

筑前ハ國志摩郡唐泊浦の伊勢丸といふ。水主初頭とも二十人。宝暦十二年十月。奥州常陸の埭なる。姥屋ハ岬の海上ふて

難風よあひ。天竺に属嶋。渤泥へ漂流し。同國中。「カラガニ」「ソウロク」文郎馬神などいへる地を遍歴する内。同船の者ハ残らず死亡し。只一人活のびしく。明和七年六月十六日。渤泥に近江。瓜哇國の都城。「バタヒヤ」より発船せし紅毛船にて。日本へ送れ帰国し孫七なるもの。渤泥ふなける間に珍物を審ふ事紀しし。七天竺活と標紙せる書一巻あり。其中より抜萃せる奇談。

もるハ沢ふ紀ものぬ。全編ハ海外異聞ふ収録を。

○異菓　渤泥

孫七そしら渤泥へ漂着せし時。陸より山林ふ入るに。栗のめき菓。枝も撓ふ生りを。行れも飢渇ふ。あまりふ食るふ。其味ひ甘酸し。ちぐく赤て頻ふ肚腹胃完痛あるも酒ふ醉しるやく目眩。卒倒ることもなど。死ふ到るもなり。良久しく

して元よ復しりぬで。サしハ板ふ
精も附。鮮魚剣をも助ける。後日了
土人よ行迷ど。此実紙搗碎く大河の
測へ沉ム。水底ハ魚ともく食喰喎浮ふ
時。網を入く是紙元。大よ毒ある菓子
ヲと結ゝしとなん。

○日本人を見世あみて　同上

渤泥國中「カラガニ」といふる城下ふ。吟ひ
居ゝる内。其の湊ハ紙去つゝひ。漂人
小乗船をへしといふ。皆く本ふ迄

ヲ帰ちと。紙嬉しく宗務迄バ。紙ハ三
の帆を引揚。同国中「ソウロク」の城下了
着ヲ年ー。同紙の者紙打分て居ゝく所と
へ賣渡し。幸五郎といふる子主と孫七
をバ。「ソウロク」の地へ賣渡しぬ。二人ハい
うるる雙貝ヲ見ると。いゝ〻欝悒ふひ居
ゝふ。夷ども来ゝて。延ふる月代を剃せ。
日本風ふ髪紙結せ。羅紙ハ奪紙皆せ。
戯墨を擦へゝふる所へ帯行ぬ。二人ハ一夜ハ
合点行ぬど。夷どものふるまもふ加て

居るハ。ちいさく小紙たゝ敷を拵へ。銅鑼太鼓
囃内を拵へる烏鬼どゝ後ふ列をし。拵
子可笑しくもおかしき体。いろ〳〵面白く紙
こせ物ふるる事ゝ金得ちらら。見
物の男女山のごとく集ひ。疾くしかもと
ゝふるもあや。ロく〳〵喊起りて。こゝ外ふ孫
の夷。行たりとも日本ふ紙唱ひて踊迷
といふ。否といふ。金紙や矣りれ〳〵ぞら
んとい情ふ。形仮たる。池の泥亀
そ。ぴんぴへ五時ふげ節泥亀の子と。是ハ西国の小唄なり

取沢拍子ふ躍里了迷バ。今までの看人と新
入れ看庶人と入替るさ。行ほもかりしぬ
形勢ふ。丈より此女人紙駕籠ふ乗せ。
所々方々紙見世ものゝ連ふ。そ引ハ
食物ふ紙を附。火酒紙仮せ。て。簾
畧ふハせ。けり。

○火酒 同上

此地の火酒ハ。飯を炒く瓶ふ入紫糖れ水
ふ浸し。ゑて。泡立て涌上るたり。丈を
泡消く後。釜ふ入醍をゝて。麦々を引と

たり

○イリンカワトの人物　同上

男子ハ身の長六尺ばかり。耳もく鼻。耳朶に真珠の環を入れり。髮ハ赤く縮れ。眼の色淡白し。皆丸裸にして。褌ばかり上ゐ。いさゝか物を纏へり。女ハ耳環をつなぎて。瑤珞のごとく下ケ。牙ハ羅ばかり衣を穿て臂より先と胸とを露す。髮ハ。生花を〻れる。螺髮を堆

渤泥國の人ハ行方も大抵同じ風俗のおもむきなり

○死人の首を切替　同上

「イリンカワト」の地にて。親死たれバ首を切く残し置き。外人ハ首を切て死骸ハ接。厚く是を葬る。男ハ女の首。女ハ男の首を葬る。有者ハ高く賣人を買。高く接首ハ備とす。貧困にして賣人を買事能ハざる者ハ死骸の科人を乞受て。首を接。又ハ他地へ出て椎埋し。其首を来て葬れハ

倩らるるなり。

○文郎馬神の風土　同上

文郎馬神ハ渤泥國中の都會なり。南京。福州。山東。山西の華人倩地しく舗を設く。彩紙ハ行れも尾蓋なり。市街紙板ハ行れも絵なり。往来の人ハ紙踏で華紅蛮舶輻湊す。甚繁昌の地なり。孫七ハ此町内の綵帛舗へ金銭三十文ありて買元逆。呉金銭ハ一文を銀十銭目ハ当る紅毛の金銀銭ハ通用らるるなり。絹殺しの下男となり。名を日本と呼れけり。主人ハ華人なれ名ハ紙タイコン皮とゝひ。妻をハキレトンとゝ。伴當手代も華人なり。下男ハ鳥鬼。下女も崑崙奴の娘なり。上下二十人餘のくらしなり。家内の主人夫婦老母とも結構人なり。家内の元老なれども玉行義つよく男女席代同じくして食せり。飯ハ下男ハ捷セ下飯ハ下女ハ調理せむ。呉玉都て吸気なりて孫蔵五六月ハ気候のゆく忘れ。四時とふ草木ハ花咲満て絶ずみとゝ家敷みて淩

うたたり。さるかうふ蚤蚊多し。米と麦と蚊とたり。米は蚊特にたりとなり。

○言語　同上

文郎馬神ハ。是ハ何ぞといふる。「コレサミヤア」ぞ。さるかうするとりつ事を「テウサミヤア」といふ。数ハ「シヤトウ」「チカ」「アシハウ」三○四の重語を脱せり「トロ」五「アンイ」六「トン正」又「ヤツトウ」七「ハロウ」又「ダラハン」八「サンヤア」又「サンヒイラ」九「サウポ」十本書ハ此外の語紀さず。

○商人　同上

街路を行ふ坊賣。声にて喊るなり。

阿刺吉賣ハ噴呐を吹。貨郎ハ竹彫にて拍子。賣油郎ハ鐸を振。醤油賣も同じ　賣肉翁ハ小太鼓にて歩。行れも擔夫ハ肩にて賣あるく。

○婚娶　同上

孫七ゥ主人の才カンベン官ハ。作伐をする人有て。結親をのひ。良日にて揀て燭礼あり。

中良家ハ小山婦ハ此比小住居する華人の始るべし。小家の人は家の女を娶る時ハ男の媒妁利吉婦を以て妻今を以て活書に載る

官郎の方へ聘礼の品

を送る。其物件ハ。衣服三襲○行れも家柏かを方の
ハ、こゝを函事ハ四を送る
金金金造る戒指六つ手て脱ハを
金九環二つ合算十二本紅毛金銭百二十文履一足襪
一足　大酒一斗入二瓶　蜜蝋五十斤掛の大蝋燭二挺猪
牝一疋　牡一疋　鶏一番　家鴨一番　右の東西或ハ箱ハ入又ハ
臺ハ載る。下人数多ハ拵せ。媒人嬌客を
こしめ附添の人人。都て十八人新婦の
家へ行く紅後代調へ。酉牌ハ家ハ帰る
バ。即刻新人の方より送る物あり。衣裳
一名　巾着一つ　赤き毛氏ハ。一つ○中良案ハ毛華人のもの

物方より　杭六〇長壹尺五寸ある。この二の是ハ氏の杭あり長二尺なるもの二
是ハ夫れ杭なり長三尺なる杭二つ夫れハ足の杭なり
新郎の方より送る。猪。家鴨。鶏。いづれも雄氏
ゝめる。雌を返し。此三種ハかくのゝ元ハ一して五家中く調理
金銭ハ二箇。多あ大蝋炬も一挺ハ戻一
ぬ。聟の家ハ新人の来ハ新ふ。彼戻
ハ巨蝋ハ大氏。半切桶ハ米氏盛
上。其の其中一押立く門首ハ出。ざめき涙
く待間もなく。彼聘礼ハ立る大蝋炬に。挑
燈二張押双べく先を照る。新人と同し年齢
の婦人二人。まぶ夜氏被きて左右ハ立る。

新婦ハ初ゝ新郎を家ニ首飾ハ金の元結銀の櫛ナニ本の釵をさし耳朶ニ瑠璃をかけ手足ニ金の環を入衣服ハいろ〳〵斉整ニ扮天蓋のかき物を前後の前後十二人。悉し来る蠟燭。彼半切〳〵一面ニ立ル花華燭の席へ通れバ。氏族家族をもしるし町中の者まで。毎ニ赤い蠟燭を燈し肩を挨し見物並〳〵へ集ひ。新人ニ対して千歓万喜を演るなり。見一来ハ。媳の容貌をうらんがるなり。其燭し玉燭炬のうち共席ニ俗ニ爨堂まで燭一つづゝとなり抽象ハ客堂ニ居飾れ飽食ひ飽飲大吹大擂ハ客を揃して帰るなり

○丁子　英　椰子油の價　同上

此地丁子胡椒を産ス。紅毛人冠手銀ニ入て買ふ丁子百斤ハ価銀百六十目程乃つまりなり。（胡椒の直本書ニ脱ス）

椰樹多し油を絞て炮油ス一斤ハ價八十錢なり。

中良案ニ椰樹ハ天竺地方ニハ何地ニも産そなり。其樹きゝて良材なり。舟ニ

車を造る。永く破壊せず。其家ハ屋を蓋
ふらし。まゝ編て帆に用ゐべし。その実ハ
飢を療。其漿ハ渇を止む。又釀して醋と化
し。砂糖と化し。酒に化して上毋の失酒となる
中夏葉ハ是カラパア焼酒なるものあり。カラパアハ椰子の蕊
名なり。此物を製し。是ハ甘味にして気味こげしさ焼酒
を長崎ハカラパア焼酒と
唱へり。油ハ炬油に用ゆるのみ
なり。金瘡。痔疾に用ゆ。効あり。其莖堅く
して釘と為べく。殼ハ碗に造り飲食に盛
べし。我邦にハ未だ多飲に用ゆ。皮ハ
編て索となし。錨纜に用ゆ。一木を種く
一家の用をなす足れり。往年時陽比舌人
何某の家の庭中に此実を拾ひ蓋に
其芽を生せし事有りしとかや。たゞれハ
吾邦の内。暖気なる地方にて種試べし。此樹
を生じ来るもあるべし。を果西玉のこと
くなり。竜眼肉の生ずるに似たり。
なり。

○年中行事　同上

除夜ハ客堂の天井に印花布の連縫くる
を張。壁にも同じ。幔を門に。除夜大炬

竈を強し。戸外閑して竈り居るなり。扨五更三点より。毎家の主人衣服改め親手挑燈を灯し。新年礼賀ふ沿門をあるくなり。閑〳〵ら門の外より「サラマツタ」といへば内より「ホリロウ」と応ずるまで門へハ入ず。門首へ名帖を貼く。親属ハ窟を開く内ふ入右の接拶了て後酒肴を出して祝ふなり。是も其地ふ居の華人の礼なり土人の礼ハいふなり。ホリロウ」の語華語にて自然に此地の河を云ふなり。書にもみえたり。

あり。製法ハ糯米を粉ふ碾き。砂糖水ふて

溲交。蒸て白〳〵く搗。切く丸く作るもあり又押平ゑて角ふ切も有なり。白餅ハ砂糖の名。黒餅ハ黒糖ふて水ふて溲る。年始客の往来。さ月ぐ日ふかふ〳〵ざらしなん。三月ハ節供ハさくらの色。又月の節句ハ糯米紙ふて浸し。笹の葉ふ包み。砂糖水ふく浸るもあり。又蒸も有なり。七月の盂蘭盆會も日本ふ習ふざる越なり。名ふ異を。

○燕窩　同上

此地の山洞。川ふ沿る石窟の内に。「カバヤ」と

いつもの窩あり。鳥ハ鷲ゐ似たり。其窩毛おく。ちゝくと黑ゐ所の所あり。中良樂ゝ毛鷲窩なり紅毛語ゝ「ホーゲル子スチエ」といふ食料ゐ味ひ美ゐゝどり始ゐれゝ長崎ゝ多ゝ

紅毛人入銀して一斤代銀八十目ゐ買ゝて

たゝ。炬を焼しゝく岩窟ゝ入がつゝぐゐて

元獲ゝ番人蕃主ゝ制禁ありて環ゝ

を守ゝさで。終ゐ或年。孫七ゐ主人の傳部へ

黑坊来ゝく。件の窩を私賣ゝる所へ廻

防人来ゐ里て見ゝ代之処ゐ彼者を捕へ

て嚴ゝく詮議ゝ。色や角と詞ゝ

而詮議れゝかゝき形物なりけまバ。是まで

とゝひ切やゞて吏の帯セ一級を抜て。二人ゐ

肚代突通し。白刃を捨て逃出セバ。二人の吏ハ

弥手を負ゐゝ。一二町ゐ程ハ逃ゝ息端て

倒伏ぬ。此事おひゝく少代人数多の役人已ゐ

ゐ物を提起ゝ。ゐ所ゝ近ゝれ。山ゝ代ゝ

ゝ逃登りしゐ。葛蔓小ゝまゝひて。逃延ゐゝくや

ゝひけん。大木の梢ゝらゐのゐゝ隠ゝ居ゝゝを。

役人ゝも目ゐゝ見ゝ。是。鳥流の流口代探ゝて

出ゝれバ。たまゝも敢ゐ逃代谷底ゝ落ゐ

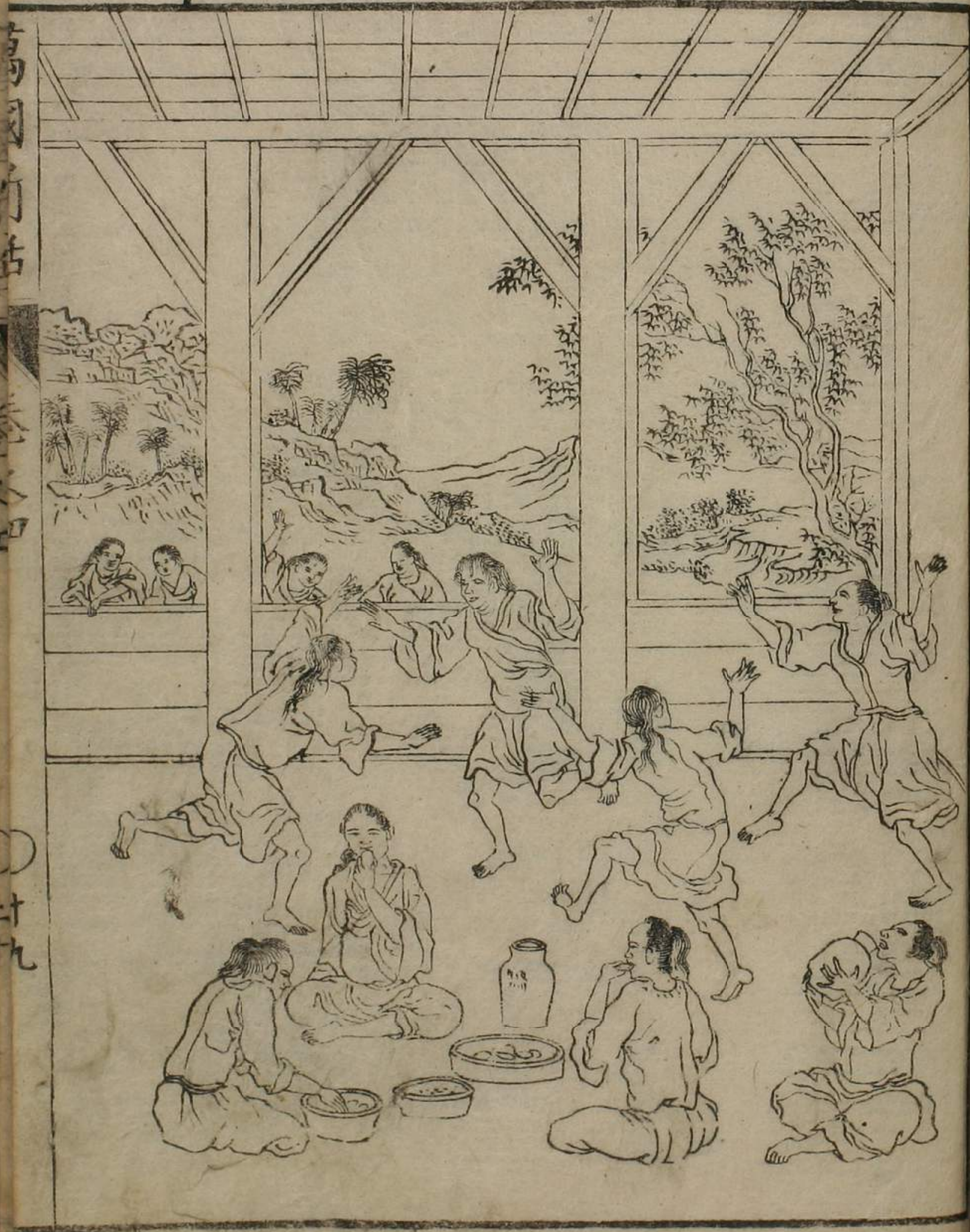
されば近人の者ハ去捨てて引返し。
常傷人を見れバ。早急ハ絶よけり。扨谷へ
折落されて死る事ハ。つゝふ傷を去置れ
るまでなくりれバ。辛き命紙助り。二三日
の後谷伝ひよ出ひお。何ぞもるく逃躲
走りるもぞ。

○裏居者歌舞を　臺湾

往昔臺湾ハ主なる紅嶌なりしを。何の比
ヨリ。紅毛人東南の諸國へ船を出に便れ
地なり故。押寄走るく城郭ハ搖く。時の名を

「ホルモーサ」と稱しる。ぬるゝ寛文年間。國
性爺厦門より此嶌へ押渡り。紅毛人を逐ひ
て。おのゝが居城とし。地名をも東寧と改る
るハ。あはれ人の知所なり。人物風土ハ紅毛
雜話中。海路乃紀の條ふ記しれバ。そ
きぬ。此地ハ人死もれバ裸體ハして衣の
上よ卧ます。其傷ふ火を焚て焙り乾る。其
臭氣鼻ハ搏く拔ぐし。そ。裏ふ居夷
ども。死屍を燥て乃。酒ハ喫し肉を食
ひ。昼夜踊狂ぐとなり。此嶌ハ「ハレンテイ」ふ

居喪者歌舞之圖



大寛人殯殮之圖

載せられ。小山氏の摸写せるなり。固ふしよ。
國性爺が子。鄭錦舎。嶌の主る叶。奥州
中村。志称和の郡。太那志保とする地の廻
船。大寛へ漂流せしを。寛文十三年八月
日本へ送り帰しとする所あり。その節船主
吳明なる者の上書。家兄岡野氏より仍
て殆花氏。漂民の款状。および上書の文ハ。
海外異聞に載せり。

○濱田兄弟智勇の話

濱田兄弟が大寛の酋長を窘しめ事ハ。西川氏
既に記し事なれと。珍品を載する因に。其巻
流。寛永年中濱陽の郡官末次平蔵なる人。
帝亜の地方へ回易のため出洋せしに。運船
日本より異國へ出しとする高船を末次氏九艘あり。末次氏二艘所有
一艘荒木一艘糸屋一艘泉州堺にて伊藤屋船一艘京都にて茶屋一艘角倉
一艘伏見屋一艘あり寛永十二年外國渡海停止せられ故ざいなり
船の形華船に似たり通商考にも品を出せり　大寛所産の書
洋中にて嘲弄のあすり。貨物をもとられ
ふ。船人ども恨憤るとハいへども。彼ハ大船にて
こ火器兵器を備へたり。此方ハ唐交易の船ばかり
しとする高船なれハ。もとより兵器も
不論。紙勘うさぐ事の破紙引出人と手算方計

て潔よ虎口を遁れ。磨鈍ふとうたうして
遠くふ長崎へ迯帰り。爾々の史代迄道ひきバ。
平蔵念怒として怒悩を冲。ありつき夷どもが
振巴うの。罷々以来日本の財よ拾もさてざるうど。
日ふ拙見せてくまんぞと。昌刻管内の町人濱田
弥兵衛なる者をぞ招きける。扨此濱田弥兵衛ハ茅
を新蔵といひく。夷人ともに仕貿剛強ふして頗
智器あり。使をりつく世ふ明。平生人よ屈さる代
以く恢快とて。未以氏時常叔伯叔を忘して
厚く恩を加ゆれハ。彼等ふ部人の如く伏従ひる

あ。さて古を使を弛りるたり。程なく兄弟の者来
りけるバ。平蔵収く出迎ひ。彼夷たが法の法度
を語り。私の意趣ハ扨置き。海内の強国と称を
元し。日本の和となれハ。其分ふさしを如し。
此報ふ泡吹せんぞる者。你等を為くふ如し。
色も角も能ふくくひ。ひさもと任憑て央られ
バ。夷人いと易くうけがひ。弥兵衛弟弥左衛門
未以よりの附人を加へく十八人。いづれも高人の
弟よ扶扮。私ふハ貨物を積入。不日ふ支度と
のひられハ纜を解やいる。帆を引揚て地方を

萬國新話 卷之四
寛之酉長圖
薄田兄弟宮大
萬國新話 卷之四
三十一

とゝもれ。海路ハ大ハ難しく。奔鯨白馬の浪波をさ
ゝヒセぢて。追風ハ玄楫をぬきて。日あゝぢ大寛
者羅しけり。彼地ハ人くもさぞ。番卒ハ
く紅中を點見るるか。原来ハ流れざるの旅商ハ
寺格ハれば。蛮人ども。さゝバ苦しかるまじとて
「ゼ子ラル」へ酋長の蕃語是紅毛日本の高袖まゝ
置所なり
中を啓しれば。利慾ハ走るなれバ。高客
ゝゝより。速ハ呼出さんとぞ。あゝゝふ對面しく齋
来り物件を問。濱田氏ハ物ゝ
些の貨物をこゝ出しし。是所後ぞ彼地

ら〳〵なぐ云ヒ。まぎゝしく曲線の布〳〵擦を荷めハ糸
紙帛を足切く電の閃めく。花をつく「ゼ子ラル」を
元て押付。拔者を拔多もおく。抱先〳〵指附る。
光と似ハ影花泳た勢門。拔連ゝ突立ゝり。色彩
足く侍側の蛮人。ハ刀を抱〳〵逃ゝもあり。拔を
拔ゝ者も有り。玄中間の渦ハめく。上を下へと
かへしけり。ハ小和〳〵味方の者。ハ拍子を吹
ようゝおく。日本刀を拔うざ〳〵。奥て内〳〵乱入玄
喧噪大ゝなゝぢ。其時ハ糸大音を上。やあれ
夷ども。甫等みぐるふ乱ハ動うさバ忽「ゼ子ラル」

を一突ふ。そべし。静まらく些細をはと呼りる故。
あくまでも獅子の吼るがごとし。蛮人ども山一云よ僻易
し。左右なくも寄付ぎ。右手あハ剣の柄を左手
ぐり左手ハ一把の汗を握り。斤嚙を飾ぐ伺ひ
ける。泳ぎ出兄弟「ゼ子ラ匹」を引起し。彼一條を
盤問れバ。「ゼ子ラ匹」慄々若いふゆ。いふふも哀
訴をそそうきしハ。我配下の蛮人なり。方今互
市のあふ他國へ私を送ぐ山地よ立ざれハ。ゆり
来る日迄待く。重犯刑よ行ひ。罪を贖ひ来る
べし。迄までの贖ふ。我一ふを与べと。十二歳

ふ。ける男子を出。自今以後貴國の私ふ接
さしもつくまじし。海よ山ふ捺を立ぐ。
又者今ハ。ゼ子ラ匹を赦し。人質を引立て
京師。千里の波路を一走ふ。七清八帰帆
く。末次氏へ面謁し。人質の子我渡りる。其年
の内大寛の「ゼ子ラ匹」彼海城せんとし。一ッ私め
蛮人ども我。車く刑よ行ひ。末次氏まて添く
罪を謝しりる。「ゼ子ラ匹」ふ送姫
もおきるのあれど。さるでハ連。翌年人質を
返しりる。波濱田が智雪の行。始皇を刺損

なくる朝鮮ぐらハ日をかぶしうして海まぐ
うぐ。ふるハ世代早くして。第新荒ハ肥の
みちの後の国。行末度の治とたりなるべん
此国ハ「レニテイエ」ふ栽する北山氏の模型
うたり。文字ハ同ぐもぐる異国の果まで
ヒ。畫ふ字ハ第記しく芸術のこと。宿田
兄者ハかへるくもの日本魂のまゝ乃天之充地ふ
徹りる者なり。

附録

○巨銅人　羅得嶌

亜細亞洲中地中海の内ふ。「ロッデス」楽得嶌　楽徳ふ　ふ
一の小嶌あり。「ナトーリヤ」那多理亜　ふ属も。諸国の
高私湊集して最豊饒の地なり。其時の港口
ふ銅を以て鑄成したる一軀の巨像を建てり。
名づく「コロシユス」ふ。中良紫ふ見世東七奇の一なり又「ロッデスベールド」ふ
両足ハ海中ふ石をりて築たる。二の臺を
跨て立てり。其跨下ふ潤ふして巨艘行交
して通停せざるふ。手の指尋常乃人

港口銅人之圖

地中海中樂德嶌

あををりて合抱するばかりなる。全体の背いさ。
あれ共以て推へ知るべし。是方より西時八精
巧無比。まことふ海内の奇観なり。往昔國君
鑄工「レイシッピジッシピユール」なる者。および其才子
「カーレスレイシデユス」なる者共人命じて
造成せしむ。其像共建る時。大石数多體内ふ
納め鎮め。永久ふ安置せん事を計りる。
丈より星霜六十五年共経る後。地震の為
ふ摧倒せられ。基址ふ小海ふ沉没を碎て
涯ふあるのみ阜陵のみ。國王縣令「サラヒ

ー子」なる者ふ命じ。駱駝九百隻を以。彼破壊
せる巨像を寺観ふ運送せしめ各所ふ点を
修繕せしめ。明の末西洋より帰化の
人支那ふ到る時。彼海口共過て親く朝人を
見ることなり。尤手ふ燭を持く。我八ふ与
海神共照し。膝行して港涯を語ふ便
なりしむ。其火を點ずることなる時八。足の内ふ
旋生る焼あり。屬共注く体き八。能内をも
ゞて掌上ふ出。燈よりを施ることなり。朝
人の拳拳より。日〳〵ふ人支千餘人おのを十

二年ホ〳〵て彩成らしめ。此圖此花ハ小山汎泥亀子ホ紅毛画を倣写せる物なり。

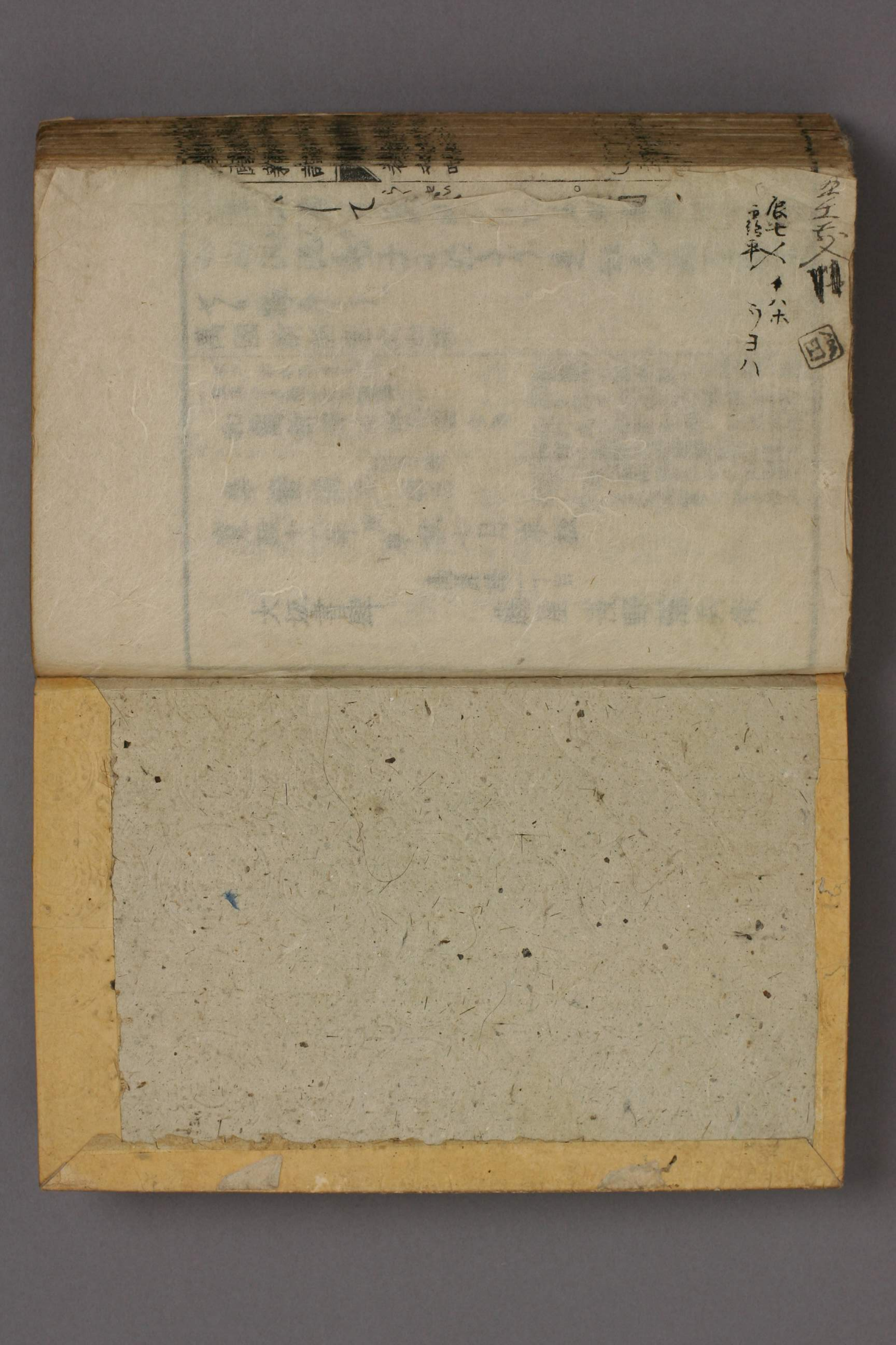
萬國新話卷之四終

水戸赤水長先生閲
浪華宗吉橋本先生製譯

和蘭新譯地球全圖 全冊

和蘭冊の圖本數十を校閲し圖説を附す方域の精微諸番乃区別或ハ物産竒種の産地脚板相對の考證其他異聞珎説を挙且五帶三線二極黄赤道を明し只地理の委きのみあらず天文初學の一助を傳ふ

華蠻通志 折本一冊 嗣出

寛政十二年庚申秋七月求板

大坂書肆 高麗橋一丁目 藤屋 淺野彌兵衛